

論文

韓国の互助慣行

—日本との民俗社会学的比較—

恩田 守雄

1. 序

本論文は互助慣行をめぐる鈴木榮太郎の1940年代の朝鮮と伊藤亜人の1970年代の韓国についての先行研究を踏まえながら、筆者が主に2000年以降行った全羅南道の島嶼地域の漁村を中心とした聞き取り調査による知見から、互助ネットワークの実態を日本と比較しながら明らかにすることを目的としている。始めに日本の田植えや稲刈り、屋根の葺き替えなど労働力を交換する等量等質の互酬的行為のユイ、共同作業や共有地（コモンズ）の維持管理でヒト（労働力）やモノ（物品）、カネ（資金）を集約しその成果を分かち合う再分配的行為のモヤイ、冠婚葬祭で手助けする支援（援助）的行為のテツダイにそれぞれ相当する韓国の互助行為の等価物について分析する。次に韓国の互助ネットワークの特徴について儒教倫理を基本とした同族意識（主にタテの社会関係）と地縁意識（主にヨコの社会関係）という点から浮き彫りにする。最後に日本と韓国との相互関係を地理的に近い対馬を事例として「互助慣行移（輸）出入」の仮説について試論を述べる。日韓両国の互助慣行の相違点と類似点を通して、本稿が東アジアにおける人とのつながりや絆について考える契機になることを期待したい^(*)。

2. 朝鮮半島の代表的な互助行為

(1) 互酬的行為

①朝鮮のプマシ

朝鮮と日本の民俗に類似する点が多いことは、たとえば神域を画する禁縄と注連縄との比較などに見られる（秋葉, 1954）。それは互助慣行にも当てはまる。戦前戦中の朝鮮の農村事情の記録はそう多くなく、互助慣行についての先行研究は少ない⁽¹⁾。日本のユイにあたるプマシ（품앗이）は自家の労働力で足りないときにする等量等質の労力交

換で、2、3人から5、6人あるいは20人から30人になることもあるが、普通は2、3人の労働力の交換が多い（鈴木、[1943b] 1973, 67-68頁：1958）⁽²⁾。このプマシは草刈り、薪取り、除草、屋根葺き、垣根の修築など、また麦刈りでも行われたが、最も多いのは田植えのときである。牛は2人、3人分に相当するが、男女に違いはなく、また成人（壮丁）も未成年の若者も同じ扱いにされることが少なくなかった。織り仕事（織機の準備作業）、畑作の手入れ、漬物など女性だけのプマシもある。日本では農作業以外に味噌や醤油づくり、粉ひきなどもユイで行ったが、朝鮮ではそれらは少ないものの家事全体にわたり行われた（同上、445-455頁）。

地域によっては男性と女性間のプマシはなく、牛1頭が男性1人分に相当するなど労力交換の条件に違いがあった（鈴木、[1944] 1973, 316-327頁）。プマシは食事の饗応を伴うことが多く、同程度の食事を提供できる者で組むことはヨコの社会関係を反映している。この食事形式には各自が自宅で食べるマルンチョリ（乾いた食事）と労力提供を受けた家が食事を出すジョズンチョリ（濡れた食事）の2種類あり、プマシでは後者が多かった。それはまた麦飯しか食べられない者どうしの生活水準を意味した（同上、[1943c], 1973, 107-135頁）。

プマシはハングルでもともと相互扶助（상호부조）の意味をもつ。プマシは「^{ゆいごう}結耦」と書かれるが、「耦」は「二人並んで耕す、二人組、とまがら、相手、つれあい、向き合う、合致する」などをさしている。この言葉から、日本のユイ同様行為の対称性すなわち互酬性を意味していることがわかる（恩田、2006）。それは厳格な等量等質性を求めたが、相互の信頼関係に基づき、労働力の種類や能力、時間で過不足があっても許容してきたとされる。この点日本ほどの厳密さにはないと言えよう。なおこのプマシは隣保組織とは関係なく行われることがあり、日本のユイの組織が永続するのに対して朝鮮のプマシはその都度必要に応じてつくられることが多い。

特に鈴木が強調しているのはプマシが助けられたら助けるという「礼」にある点で、この礼儀を制度化したものがプマシと考える。この点は後述するように儒教倫理に基づく互助慣行の特徴が表れている。労力交換の基準は人間の労働力が皆対等であることに示され、そこに「人間平等の仮定の上に立つ協力の合理性」を鈴木は主張した（鈴木、1958, 28頁）。この合理性の論理は日本のユイも同様で、そこには男性と女性、成年と少年、人間と動物の労力基準の違いはあってもそれらは自然界の差違で、お返しをするという対等な交換行為が基本にある。この合理性の論理の貫徹度合いは集団の凝集性に加え、日本のほうが強いように思われる⁽³⁾。

朝鮮半島に対して済州島の互助慣行については戦前に泉の研究がある。1930年代の調査によると、日本のユイに相当する「手を貸す」意味をもつスノ（ヌ）ルムがある。これは半島南鮮のプマシと北鮮のチェに当たる行為とされる（泉、1966, 153-156頁）。この他「順々に」の意味をもつチョチョあるいはスヌルプム、スヌムとも呼ばれてきた。農

繁期の播種期や収穫期で4家族くらいまでが相互に労力提供し馳走でもてなしをした。小家族を超えた洞（村）あるいは二つの洞全体に関わる共同作業にもこうした呼び方がされた。なお済州島でよく知られている海女の漁村では2月頃から半島（陸地）や日本に出稼ぎするため、その不在の労働力不足を補うため播種や除草の作業をスノルムとして家族間で行った。海女以外の遠海出漁者が陸地や日本の船に雇われて労力不足になる時も、同様に山村から女性の労働力を得て農作業を行ったが、こうした行為はしだいに労賃化してくる。

②韓国のプマシ

〈1970年代〉

戦前戦中の朝鮮のプマシに対して、戦後韓国のプマシはどうであろうか⁽⁴⁾。以下伊藤が調査した1970年代と筆者が聞き取りをした2000年代に分けて述べることにする。日本のユイにあたるプマシは田植えや稲刈りでの労力交換を意味したが、伊藤が70年代に調べた珍島では農繁期の労働力不足を補うためにプマシが行われた（伊藤, 1977b）。こうして親族間の手助けや雇用によって労働力は確保されたが、この他近隣の家との労力交換も欠かせず、田植えや稲刈りの時期になるとプマシの相手を見つけ日程の段取りをつけることが行われた。ユイ同様対等のヨコの社会関係に基づく等量等質の交換行為だが、その相手は後述する互助組織としての契（ケ）の仲間がほとんどで、信頼関係によってプマシが支えられている。70年代当時はまだ田植えではカジュ（牛耕役）が重視されていた。長期間の集団レベルの約束事が中心の契と異なり、田植えや稲刈りという短期間でのプマシでは個人（世帯主）間の関係で取り決めがされた。

〈2000年代〉

全羅南道の珍島郡智山面細方里^{セパン}では依然としてプマシが行われているが、それは米やネギ、白菜をつくるときで、かつて伝統的な家をつくる屋普請であったプマシは今はない（2011年9月聞き取り）⁽⁵⁾。家と家との距離があり、最新の生活様式が入り込む中で人間関係が希薄になり、こうした労力交換も少ない。韓国も日本同様、過疎化・少子高齢化の現象が生まれている。同じ珍島郡義新面のカゲ里では、プマシは同じ仕事をもつ者どうしで主に農業をするときに使うが、ここは農業が少なく漁業でアワビ養殖の容器の掃除やアワビを売るとき労力交換を行っている（2012年3月聞き取り）。

同じ全羅南道の内陸部にある海南郡玉泉面永信里の農家でかつて農村開発の仕事をしていた70代の男性によると、プマシは田植えや稲刈りのとき行われてきたが、日本同様機械化によってその必要性がなくなり現在ほとんど見られないが、ニンニクや白菜を作る畑作ではまだ機械化されていない分プマシが行われている（2011年9月聞き取り）⁽⁶⁾。労力交換のときだけでなく、皆が集まって仕事をするときにも、このプマシという言葉を使う。古い城壁と茅葺き民家が残る順천시楽安面の東内里（楽安邑城）では、米と麦

の農作業で牛をもてない家が飼っている家から牛を借りて、その分労働力でお返しをするプマシがかつてあった（2012年3月聞き取り）⁽⁷⁾。村内で行う茅の屋根葺きは今は2人が屋根の上に上がり、5人が下で茅をさばいて作業するなど、茅を買って専門職人に賃金（1日1日当7万ウォン）を払っている。

新安郡の黒山島ビ里はアワビ養殖の漁村だが、50代の男性によると、漁業以外に米や麦の農業で、また家を建てるときや修理でお互いにする手助けをプマシと言った（2012年3月聞き取り）⁽⁸⁾。今でもこの言葉を使っているが、現在は手助けとしてプジョ（扶助）の言葉のほうが多いと言う。黒山島郷土研究保存会の50代の職員によると、プマシはもっぱら農業のときに使う言葉で、漁業では船に乗る人数が限られ、しかも個人の利益（私益）中心でプマシは使われない（同上聞き取り）⁽⁹⁾。同じ黒山島の60代の女性によれば、アワビの大きさを選別するときや養殖の容器をきれいにするときにはプマシという言葉を使ってお互い手助けしてきた（同上聞き取り）。同郡の都草島では、ほうれん草や米、麦の農作業をするときプマシを使い、この他塩をつくるときにも労力交換をしてきた（同上聞き取り）⁽¹⁰⁾。莞島郡生日面の徳牛里ではプマシは農業で使う言葉で、アワビの養殖が中心の徳牛島では使わないと言う⁽¹¹⁾。

新安郡荏子島（面）^{イムジャド}デキ里の50代女性によると、トウガラシを採るときプマシをし、同郡安佐面者羅島（里）^{チヤラド}と安佐島の敬老堂にいた70代の女性たちからトウガラシ、ニンニク、タマネギでプマシをすることを聞いた（2012年8月聞き取り）。また機械化されているとは言え、米の運搬ではまだプマシで協力することを荷衣島（面）の60代の元婦人会会長が話してくれた（同上聞き取り）。このようにまだプマシが広く労力交換で使われていることがわかる。

麗水市華井面の沙島（里）^{ヨス}では、野菜やタマネギの農作業でお返しを伴うプマシをするが、返礼を期待しないで手伝うこともあった（2011年9月聞き取り）⁽¹²⁾。麗水近郊の橋でつながる突山邑ユンリン里のソウル村の70代の男性によると、麦とさつまいもの農業のときプマシという言葉を使い、またサワラやカタクチイワシ、タチウオなどを獲る漁業でも力を必要とするときにこの言葉を使ったが、今は個人でするようになり10年くらい前からこの言葉は使われていない⁽¹³⁾。

済州島では米が獲れないため、麦やみかんでスノ（ヌ）ルムを行った（2007年8月聞き取り）。既に述べたように地元の人にはプマシではなく「手を貸す」意味をもつスノ（ヌ）ルムと言うが、これは行ったり来たりすることを意味し労働力のやりとりを示している。収穫のときには大勢の人手がいるのでお金を払い出稼ぎ人を雇うこともした。この他じゃがいもやにんじん、ねぎ、胡椒でも行った⁽¹⁴⁾。20年前までは畑をおこすとき牛を使っていたが、それが機械で種を蒔くようになり現在スノ（ヌ）ルムは見られない。しかしまだみかんではこのスノルムが行われ、タマネギやニンニクなど農業をするとき今も使われている（2012年3月聞き取り）⁽¹⁵⁾。金寧里の60代の海女によると、タマネギやニ

ンニクなど農業で力を必要とするとき、スヌロやオウリョという言葉を使っている⁽¹⁶⁾。

③日本のユイと韓国（朝鮮）のプマシの比較—互酬的行為

以上戦前戦中の朝鮮および戦後韓国のプマシと日本のユイを比較すると、韓国では田植えや屋根の葺き替えを始め、除草や麦刈りなどの作業などで見られるが、味噌や醤油の製造、粉ひきやもちつきでは見られないようである（表2－1：「日本のユイと韓国（朝鮮）のプマシ」参照）。双方向の世帯間もあれば、20人から30人単位の集団的なユイもあるが、日本のユイ組のような永続的なものではなく短期的なものが多いとされる（鈴木，[1943b] 1973年，67-69頁）。また鈴木はこうした労力交換の等量等質の側面だけでなく、助けられたら助けるという礼節を制度化した側面を重視している。これは村落の共同生活を支える規律（社会的合理性）に着目する点で、ムラ社会の秩序を維持する社会システムとして互助慣行が機能している。いずれも村民がもつ対等な関係が前提になるが、それは日本では自作農あるいは小作農という小農どうしのヨコの社会関係に基づいている。

表2－1：日本のユイと韓国（朝鮮）のプマシ

日本のユイ	韓国（朝鮮）のプマシ
<ul style="list-style-type: none"> ・ 互酬的行為（双方向性） ・ 内容—田植え，稲刈り，屋根の葺き替え，味噌・豆腐づくり，粉ひき，餅つきなど ・ 等量等質の労力交換（経済的合理性の論理） ・ 永続的行為（ユイ組） 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 互酬的行為（双方向性） ・ 内容—田植え，稲刈り，屋根の葺き替え，麦刈り，草刈り，除草，薪取り，ニンニクや白菜，トウガラシ，タマネギなどの畑作 ・ 礼節としての労力交換（社会的合理性の論理） ・ 短期的行為

(2) 再分配的行為

①共同労働としてのドォレ（ツレ）

〈朝鮮の共同作業〉

共同作業はドォレ（ツレ，두레）と呼ばれた（鈴木，1958）。ドォレは朝鮮時代（1392～1910年）の後半，自営業の減少により苗を田に植える手作業の普及とともに行われるようになったとされる。これは組織や団体を含意する言葉で，その行為特性として共同性が注目される。ドォレは村落の全耕地を一つの共同耕作地と見なし，必要な労働力を提供する互助慣行と言える。村落共同体として社会意識の強制力に基づく共同行為から，全耕地が自他の区別なく一つの経営地と見なされた。プマシが都合のよい人，親しい人との間でする私的なものとするなら，ドォレは公的な村仕事に当たるだろう。小さい部落ではプマシを部落全体で行うこともあるが，それはドォレとほとんど同じ公的な作業となる。全体の田畑に対していったん労働力を中央に集め，それを個々の田畑で再分配する方式という点で，それはモヤイの共同作業に近似する。鈴木はプマシ同様ドォレも

作業方式や組織として理解したが、これらはいずれも共同の労働慣行、すなわち相互扶助の形態（行為様式）も示している。

個人経営の土地に見合う労働力を提供するときは問題ないが、大規模農地をもつところでは提供する労働力よりも多く労力提供を受けることになるため、その差額は賃金を払う。逆に自分の土地に必要な労働力以上のものを提供すれば、その分労賃をもらうことになる。これは16, 7歳から参加する男子のみの制度で、差額の勘定は賃金で支払われ、洞単位で行う水田除草作業が中心で田植えから収穫まで数回行われた。余分に提供した労働量で得た労賃は洞の財産として寄付されることもあった（鈴木, [1943a] 1973）。このように各戸の人数と耕作面積に応じた出役日数があり、自家の耕地面積以上に出役すると賃金が支払われ、逆に少ないときは労賃を支払わされる。プマシが全朝鮮の畑作地帯で見られたのに対して、このドォレは主に中南部の米作地帯で行われてきた（鈴木, [1943b] 1973, 64-65頁）。

ドォレには大人と小人のものがあり、前者は大人組として田の除草、後者は小人組（13, 4歳から17, 8歳くらい）として堆肥のための山草狩りなどに従事した（鈴木, [1944] 1973, 316-327頁）⁽¹⁷⁾。この小人組から大人組への所属変更には一定の儀式（チンセ, 進鋤の儀）を伴い、大人が認めて20歳くらいの者が入ったとされる。男子だけの小人組は日本の若者組に近いと言えよう。ドォレは組内の共同作業として役職者を決めた系統だった組織で、4, 5人くらいでするでプマシと異なり一組10人くらいの単位は集団的なプマシと捉えることもできる。日本では同じ組内で順番に特定の家の田植えや稲刈り、屋根の葺き替えなどをする集団的ユイがあった（恩田, 2006）。なおドォレの不参加者に罰則はないものの、信用を失い仲間はずれになることが少なくない。それは全員参加型の村仕事であり、労働力を全体でプールする点では共同体的な合理性が日本よりも強いと言えよう。

提供した労働量から自分の耕地のために必要な労働量を差し引いた分が、差額の労賃として決済されるドォレは等量等質の互酬性の労力交換のユイと異なり、既に述べたように一度に村落の労働力を集約する点でモヤイに近似する。その労賃に相当する分を村落の財産として納める場合も地域によって見られたが、個人が取得する労賃の性格が強い。各農家の耕作面積が平均していれば、そこに貸し借りは発生しないが、保有面積以上の労力提供に対して支払われる賃金は大規模農家が担うことになる。そこでは雇主と被雇人の関係をつくらずに、労賃の精算関係が共同作業としてつくられる（鈴木, [1943b] 1973, 64-65頁）。個別農家ごとに総決算で正確に労賃が算定されたところにムラ社会の合理性を見ることができる。ただその労力提供の対象地が共有地（コモンズ）ではなく個々人の土地であり、それらをあたかも村落の共同の土地と見なして労力提供する点が日本と異なる。土地をそれほど多く持たない貧農はその分労力提供を通して賃労働収入を得てきたとされるが、ここに互助システムを見ることができる。

なおドォレは黄海道（北朝鮮）など、地域によっては見られないところもある（鈴木, [1943d] 1973, 445-455頁）。このため必ずしもこれは全朝鮮的な慣行とは言えないだろう。やがて近代化の過程で機械化による省力化や都市化による人口流出のため、ドォレは衰退していく。農耕儀礼として早乙女らが出て盛大に行われた日本の田植えのように、ドォレも作業集団の行進には旗を掲げ鼓を持つ楽器演奏を伴い、作業終了の最終日には洞宴が行われた。このようにドォレでは農作業を鼓舞する楽器による演奏（農楽）が多く見られ、これが娯楽の少ない農民の一大行事となり広く農村文化の発展に貢献したとされる。

ブマシは年間通した水田稲作（田植え、稲刈り）や麦作、屋根の葺き替えや修繕など多岐にわたるが、ドォレは大規模な作業である草刈り中心で田植えの後に行われた点も異なる。順に必要な家で堆肥の山草狩りをするときは、その受ける家で食事を提供して接待する。この他朝鮮の村仕事には井戸の掃除、道普請、崖崩れの修復、堤防の補修などあるが、各戸に割り当てがあるのは日本と同様である（鈴木, [1943c] 1973, 107-135頁）。これらの共同作業は各世帯一人出ることが原則で、出ないときには賃金相当分を取り参加者でそれを分けることもあれば、部落の修繕費にまわしたりする。この点も参加者の飲食費になる日本の共同作業と類似する。基本はあくまでも労力提供による共同作業にある。

〈韓国の共同作業〉

新安郡の黒山島ビ里では仕事の量が多いとき、海産物を共同で採取する行為をブヨ（ブヨ、ブヨック、부역, 赴役）と言っている（2012年3月聞き取り）。また1世帯で2人出してほしいとき1人しか出せない家に対して、その代わりをするときもブヨを使う。なお岩についている海苔やウニなどの海産物は個人のもではなく地域社会の財産なのでお互いに分け合うが、アワビは個人が育てるもので自分で売って収益を上げている⁽¹⁸⁾。同じ黒山島の60代の女性によれば、かつては海岸の掃除など一世帯から一人の労働力を出すこともあったが、今はお金を払って人を雇う。ただし教会の人たちはボランティアで作業をすると言う⁽¹⁹⁾。

珍島の細方里^{キバン}では、ブヨ（ブヨ）という言葉は草刈りや道路補修などの共同作業、あるいは共同で何かをつくるときの行為をさして使われた（2011年9月聞き取り）。島近海で収穫した海産物はかつて分け合っていたが、この作業は労働力があるので今は若い人が少ないため業者（法人）に所属して給与として収入を得ている。同島義新面のカゲ里では、自発的に共同作業をするときにブヨ（ブヨ）という言葉を使う。かつては掃除を皆でしたが、今は面の事務所でお金をもらい行っているので、この言葉は使わない（2012年3月聞き取り）。莞島郡生日面徳牛島^{ワンド}（里）では共同作業をブヨ（ブヨ）と言い、海岸の清掃などをするときに使うが、里長が必要に応じて作業について指示をした（同上聞き取り）。70代の古老によれば、夏は特に海岸のゴミが多く、掃除の回数もその分

人手を要すると言う。

内陸部の全羅南道の海南郡玉泉面では、ウーリョク（腕力）という言い方で共同作業をしてきた。^{ヨス}麗水市華井面の沙島では里長を中心に、夏は毎日トイレや海岸の清掃をする。順天市樂安面の東内里（樂安邑城）では、既に草刈りや植栽の手入れなど、市から賃金が出る仕組みになっているため、地域社会での共同作業は少ないと言う。この点はこの地域でも共通で自発的な取り組みが減り、行政からの補助金が出ることで共同作業が維持されている側面がある（2012年3月聞き取り）。突山邑ユンリン里のソウル村では、70代の古老によると共同作業は麗水市からお金をもらってするので、村としての仕事はない（同上聞き取り）。なおブヨ（プヨ）という言葉は掃除など仲間内の共同作業のときに使う。

済州島の金寧里では海苔や海草類を平等に分けてきたが、ナマコやサザエ、ウニは採った人がそのまま個人の取り分としてきた⁽²⁰⁾。西帰浦市のポパン里では海女がウニやサザエの販売を集まってするが、売り上げは各自の利益になる⁽²¹⁾。全体の採取量を決めて取るときには皆で分配することもある。帰徳里の漁村（一里）では海岸の清掃が共同作業としてあり、協同組合で海の監視をするとき参加しないと罰金を科されることがあった。漁獲物は同じ組合員の海女仲間でアワビやサザエなどを分け合うこともあった（2007年8月聞き取り）⁽²²⁾。済州島金寧里の60代の海女によると、「海女の会」という組織が東と西の支部にある（2012年3月聞き取り）。この組織で主に採集した海産物を売るが、海の神様への共同祈願も行っている。バスが通る大きな道路は行政からお金をもらい整備しているが、普段は海女たちが自分たちで掃除をする。このように共同作業は地域住民の義務として、また職場集団が地域社会との一体感を保つうえで重要な役割を果たしている。

〈共有地（コモンズ）を活かした支え合い—モヤイ島〉

黒山島郷土研究保存会の50代の男性によると、生活に困った人を救済するために共有地（コモンズ）を直接活用する仕組みは存在しない。それは生活が困窮しているのは各自の努力の結果であって、自助努力が少ないと考えるところによるのだろう。しかし黒山島から高速船で30分ほどの距離にある紅島では無人島を小学校に与え、そこで採れた海産物を売って学校に通えない子供たちの学費や必要な学用品などに充当してきたことがあった。これは小学校が建ってからのこととかなり前の話である。ここで特筆すべき点はこうした地域社会の共助を支えるモヤイ島のような制度（恩田, 2006）が存在していたことである。この無人島をモヤイ島として紅島の属島（共有地）と捉えることができるだろう。なお、現在ワカメなど海産物の区域を2、3年の周期で決める「割地」も見られる。

これと類似したモヤイ島の事例は^{ヨス}麗水から陸路で行ける突山邑の漁村でも見られた。このユンリン里ソウユ村の60代の村長によると、生活に困った人を直接救済する仕組み

はないが、この漁村の正面に位置するパム（栗）島をかつて4つの村（1つの里）が共同で所有し、カキを中心に海苔やアワビなどの海産物を採り、教員の給料も含め小学校が必要とする資金を捻出していた⁽²³⁾。これは村長が小学校2年生の頃で、現在はソウユ村がこの島を所有している。獲った魚は個人のものだが、村の海産物として少しは地域社会のために使う。毎年その分漁業会（協同組合）に海産物を採る権利金を支払っている。

莞島郡生日面徳牛島（里）では、島の周囲に里が所有している無人島が8つあり、島の5つのグループがそれぞれ順番に毎年海産物を採る場所を里長が決めてきた（2012年3月の聞き取り）。海産物の収穫が多くない島もあるので、1つのグループが2つの島を割り当てられることもある。12名で1つのグループを構成し、実質5人から6人で仕事をする。獲れた海産物は各グループで平等に分け合う。これも日本のモヤイ島と同じで、地域住民で共同所有し各グループが労働力を集約してその成果を再分配する仕組みである。なおアワビは個人がそれぞれ収入を得ている。70代の古老によると、こうしたやり方は島に人が住み始めたときから存続してきたため、自生的な社会秩序と言ってもよいだろう⁽²⁴⁾。

珍島の義新面カゲ里では生活困窮者に対して、かつては米などを分けて手助けすることもあったが、今はアワビの収入が多くなり生活が安定し若い人も戻りつつあると言う。全羅南道の麗水市華井面の沙島では共有地はないが、隣の狼島には門中の土地があり、この沙島でも世帯数が50以上あったときは土地が少ないので、狼島の土地を耕すことがあった（2011年9月聞き取り）。そもそも門中は同じ姓をもち共通の祖先につながる男系集団である（李・張・李, [1983] 1991, 67-73頁）。沙島には門中の墓がなく、隣の狼島にある沙島の土地に墓をつくってきた。これは狼島からの移住者が多かったことにもよるのだろう。

これまで見てきた同じ新安郡でも半島の拠点となる木浦（モッポ）と距離的に近い荏子島（面）、安佐面の者羅島や安佐島、荷衣島（面）では周辺の無人島は個人所有で共有地（コモンズ）としての属島はほとんどない（2012年8月聞き取り）⁽²⁵⁾。なお都草島（面）では共有地として過去に活用されてきたところがあった。これは内陸部だが、学校所有の「学校塩田」として子供たちの体験学習の場にもなったが、しだいに管理を業者に任せるようになると、収益を学校に寄付してもらい奨学金に充当してきたことを、新安郡庁の職員から聞いた（2012年8月聞き取り）⁽²⁶⁾。

〈日本のモヤイと韓国（朝鮮）のドォレ（ツレ）、ブヨ（プヨ）の比較—再分配的行為〉

以上戦前戦中の朝鮮と戦後韓国の共同作業についてまとめると、同じ再分配的行為として捉えられる互助行為も、合理的な労力配分と富の再分配の仕組みとしてのドォレ（ツレ）と一般的な村仕事としてのブヨ（プヨ）は異なる。全羅南道の島嶼地域の漁村には日本同様、親島がその周囲にある属島としての共有地（コモンズ）を活用したモヤ

イ島の制度があることがわかった（表2-2：「日本のモヤイと韓国（朝鮮）のドォレ（ツレ）、プヨ（プヨ）」参照）。

表2-2：日本のモヤイと韓国（朝鮮）のドォレ（ツレ）、プヨ（プヨ）

日本のモヤイ	韓国（朝鮮）のドォレ（ツレ）、プヨ（プヨ）
<ul style="list-style-type: none"> ・共同作業としての再分配的行為 <ul style="list-style-type: none"> ・一家から一人出る村仕事 ・出ないと過怠金の支払い ・内容—道路修繕（ミチナオシ）、溝の清掃（ミゾサラエ）など ・モヤイ島 <ul style="list-style-type: none"> ・生活困窮者の救済地としての島 	<ul style="list-style-type: none"> ・共同作業としての再分配的行為—ドォレ（ツレ） <ul style="list-style-type: none"> ・合理的な労力配分と富の再配分 ・超過労働への賃金支払い ・内容—田植え後の草刈り 堆肥のための山草狩りなど ・村仕事としての再分配的行為—プヨ（プヨ） <ul style="list-style-type: none"> ・一家から一人出る村仕事（赴役） ・内容—井戸の掃除、道普請、崖崩れの修復、堤防の補修、海岸の清掃など ・モヤイ島 <ul style="list-style-type: none"> ・漁獲区域の割り当て（割地）による合理的な資源配分と公平な富の再配分 ・共有地（コモンズ）として地域社会維持のために属島を活用（小学校の学童支援—「学校塩田」など）

②互助組織としての契（ケ）

〈朝鮮の契〉

朝鮮総督府発行の1943（昭和18）年の『調査月報』に執筆した鈴木は終戦後当時の資料を持ち帰り新たに書き起こした論文で、朝鮮の契（ケ、개）が日本の講によく似ていることを記している（鈴木, 1958）。その組織と機能で圧倒的に朝鮮のほうが多いと認め
たうえで、座首を中心とした契の取りまとめ、永久に存続する契、男子中心の契、両班ヤンバン儒林の契など日本とは異なる点を指摘した。娯楽に関する契が最も古く、同族が祖先祭祀のために組織する宗契や門契が次に古いとするが、後世に最も影響を与えた契の起源や普及を高麗朝末期から生じた貢租組合としての貢物契（軍布契）に求めている。こうした契の特徴として、公共事業や社会事業を目的とした契、旧洞里すなわち李朝末期の洞（自然村）内の住民中心、相互扶助的な性格、同業組合あるいは金融組織などの性格が指摘されている⁽²⁷⁾。これらは既に述べたように日本のモヤイ同様いったん中央にモノ（物品）やカネ（資金）を集め、それらを必要に応じて分け合う再分配的行為である。鈴木は朝鮮総督府の調査で契の一般的な分類を公共事業、扶助、金銭、産業、娯楽の目的別に洞契、宗契、婚葬契、金融契、殖産契、娯楽契などを分析したが（鈴木, [1943b] 1973年）、契が全体として相互扶助の性格をもつことは間違いなく、以下戦前戦中の特徴的な契について見ることにする。

洞契は旧洞里住民により財政や自治目的で公共事業や社会事業のためにつくられた。これらは日本では組が担い自治会費として徴収されてきたが、道路整備やその他で洞有

財産が活用された。貢税組合としての契（軍布契、貢物契）も地域社会全体の事業を目的としていた。鈴木が調査した戦前の忠清北道堤川郡錦城面の九竜里では、この洞契が昭和7年頃まであり、洞有財産が地域住民の金融や冠婚葬祭の扶助に使われ、特に学校建設などに財産が寄付された（鈴木, [1943b] 1973）。この他共有地（コモンズ）管理のための松契があった（鈴木 [1943b] 1973）。これは部落全戸の加入を条件とし、部落有林を維持する組織（入会山総有団体）の共同作業によって共有意識が再確認され強化された。この他水利契は水利を管理する地域住民の組合で、日本では組合村としてこの種の水利組合がつくられた⁽²⁸⁾。同じ共有地の管理でも用水ダムの場合は淤契や堰堤契と呼ばれる組織が対応したが、土地改良組合や水利組合の発展とともに解消した。これらは部落内の洞契の一事業部門として公的な水利組合に対する私的な団体で、井戸には井戸契や修井契などがあった。

学校関係では学契があり、これは資産家に資金を出してもらい書堂を建て、先生を招聘して洞内の比較的裕福な家庭の子弟教育のためにつくられた契であった。同甲契や老人契は年齢階梯別の契で、^{ヤンパン}両班儒林の契として詩契、射亭契、郷約契などもあった。いずれも規約は明文化されない不文律で、この点は日本のムラ社会も同じである。宗契や門契は祖先祭祀のための契で、日本では沖縄の門中に見られるが、親戚が祖先崇拝のために作る組織は多くない。この他親睦友愛、貯蓄奨励、消費節約、勤勉励行、学事奨励など生活改善を勧める振興契もあった。これは日本の村落では風紀改善の運動に類似する。

冠婚葬祭に関わる婚葬契では、葬儀で為親契や葬具契があり、洞喪契は各戸から成人男子一人の労力提供がされ、米を徴収して葬儀の費用に充てた。これらは日本の不幸組や葬式組に当たる。為親契は親の葬式費用捻出のため毎月出す契である（鈴木, [1943c] 1973, 107-135頁）。日本の村落では不幸があった家の者以外の地域住民が葬儀の一切を仕切るが、こうした特定の名称をつけ将来に備えた資金集めは少ない。この為親契には名誉職とは言え、契の代表者である契長や副契長の他に資金を管理する財務担当がいて預かった資金を高利で運用する。葬具を共同利用することは日本でも見られたが、^{もこし}喪輿契のように契員以外の者に有料で貸す点は異なる。祝儀の結婚費用の捻出は婚姻契や親睦契でされる。

資金の増殖を目的とした金融契には、直接資金の運用をするものと特定の物品購入のためのものがある。前者には共同基金を積み立て比較的高利で貸し付ける採利契、共同出資による高利の利殖目的の取引契は日本の親なし頼母子や営業無尽の金銭モヤイに相当するだろう（恩田, 2001）。これらの金融契は集めた資金を契員に低利で融資するか、契員外に高利で融資してその利子を契員で分配する。後者は日本の豊頼母子や自転車講のようにその物品購入のため資金を集めるもので、平等に出資して牛1頭分の資金をつくって購入し抽選で契員に与え、全契員に牛が行き渡るまで続く牛契がある⁽²⁹⁾。鈴木

によると、日本のように特定の困窮者を救済するためにつくられる契は少なく、契員相互の扶助を目的とするものが多い（鈴木, [1943b] 1973, 62-63頁）。いずれも部落内の仲間が対象だが、郷約契や門契のように部落を越えたものもある。

直接生産活動に結びついた殖産契は肥料や魚類、農具などの共同購入や共同施設事業をするための組織である。各戸から出資して生活困窮者に貸与しその利子を洞全体で必要な費用に充当する洞中契が日韓併合前の旧感情を表しているとするなら、この殖産契は朝鮮総督府による近代化を進める併合後の新しい農村開発の感情を示していると考えられる。鈴木は日本の農家小組合にあたる組織を殖産契とした（鈴木, [1943b] 1973）。旧洞里という朝鮮の自然村を単位として構成され、区長と国民総力部落連盟理事長、殖産契の契長は同一人物であるため、地域社会の統制を担った強制的な互助組織であることがわかる。部落共栄会という名称のもとで、貯蓄や共同経営、土地改良、学校経営など組合活動を含むものもあった（同上, 62頁）。こうした運営形態から、もともと自生的に生まれた互助組織としての契が植民地化による中央統制によって保護奨励され発展してきた側面を読み取ることができる。この他農契や小作契、漁業契、鉄店契など同業者の契、また日用雑貨や衣服の行商人である^{ほふしやう}裸負商の契もあった。

済州島では泉の1930年代の調査によれば、部落林や私有林の保護を目的に出資して苗を購入したり、炭を焼いて共同販売する愛林契があった（泉, 1966, 156-158頁）。これは山火事の見回りや盗賊の監視など契員が共同ですが、島庁によって設置された官設の契でもあった。契員が共同出資して種牛馬を購入する馬契、葬儀の道具類を共同で使用する葬式契、婚礼衣装を出資して借りる結婚契、洞全体に必要な村祭りや面税の支出に当たった洞契は洞の全世帯が加入する。飢饉に備えた米や麦、粟、稗を貯蔵し必要に応じて契員に穀物や金を貸した米契や扶助契など、また米や麦を精白する^{てんま}碾磨の維持費や修理費を共同で出資管理した碾磨契なども半島同様あった。

〈韓国の契〉

(1970年代)

戦後の韓国、特に1970年代の契については伊藤の調査が詳しい（伊藤, 1977a : b）。契は一定の財産を運用しメンバーの親睦をはかることを目的につくられたという一般的な定義を紹介しながらも、新たな視点からそれを捉え直している⁽³⁰⁾。伊藤もまた鈴木同様日本の講に当たる見解を踏襲している。洞契は日本の組に相当し世帯全員の加入が原則である。村の重要事項を決めた組織とされるが、村有林や村の地先海面など共有地（コモンズ）や共同井戸の維持管理もこの組織を通して行われた。村の祭事に関わる道具類の維持管理もあり、^{もこし}喪輿を収納する小屋の屋根葺きもその作業に含まれた。強制力の強い契には洞喪契や水利契、振興契、年齢集団的なものとして男性（壮年）中心の美俗契、主婦中心のソン契（生活改善会）があった。任意加入のものには葬礼のためにつくられる喪布契、賭義契、婚礼の宴で客人をもてなす飲食物を提供する濁酒契や米契、

粳契、餅契、豆腐契など、この他ふとん契や食器契、発動機契など特定の物品購入のもの、貯蓄契、屋根を葺き替えるための屋根改良契、親睦契、学契などあるが、戦前戦中の朝鮮とそう変わらない（同上、1977a）。以下戦前から戦後の変遷に着目して、日本と比較しながら韓国の特徴的な契について見ることにしたい。

年齢階梯別の組織として青年層の美俗契があり、村の美俗良俗の尊重、社会教化や生活改善などの活動をしたが、契の集まりのときパンソリなど伝統芸能が欠かせないものであった（伊藤、1977b）。婦人の生活改善にはソン契があり、石嶺などの日常生活品の共同購入と販売を行った。日本ではユイ組や若者組のように、フォーマルな組織が互助組織としての機能をもっていたが、インフォーマルな任意加入の講もまた互助機能を担った。韓国の契にはこの両者が混合して見られると言えよう。その最もフォーマルだが私的なものが門中契の父系血縁集団で、共有田をもちその収穫が契の必要経費に充当された。村民は出生と同時に父親の門中の成員となり、長幼の序や世代間の上下関係が重視される。フォーマルな契として珍島でも日帝時代の農村振興運動当時、貯水池を維持管理するため水利契がつくられ、また農村振興会による集会室や共同作業室、共同販売店、理髪所をもつ公会堂の建設も行われた（同上、2006、110-116頁）。戦後は「強制移転」という日本の直接の影響力がなくなり、国家レベルで農村開発を進めるセマウル運動による影響は別にして、自生的な互助慣行が中心になったと言えよう。

以上が日本の組にあたるフォーマル性の強い契だが、これに対して講にあたる任意加入の契として、特に冠婚葬祭に関わる契が地域社会の互助組織として重要な役割を担った。葬儀に際して必要な布や酒、豆腐を集めるが、これらのモノを直接あるいは市場で購入するため仲間内で集め特定の者に提供する行為は物品モヤイの特性を示している（恩田、2006）。喪布契の布は死装束や喪服などに使われるもので、かつて織ったものを市場で購入するようになり、毎年米と麦の収穫期に出資しこれを貸し付けて資金を捻出し、葬儀がないとその積立てを田畑の購入に充て、また契の資金として貯蓄した（伊藤、1977b）。この喪布契は父母の葬礼のため世帯主の成人男性によってほぼ世代別に組織されたが、嫁や主婦が実家の父母のため準備することもあった（同上、1977a）。この他弔問客への接待など葬儀に必要な食糧の準備をした。契長や契財産の管理などを決めた契則はあるが、特に喪布契の諸規則だけは非常に細かく規定された。この他豆腐契は婚礼でも祝い物として欠かせない豆腐をつくるため一定量の豆を仲間内で持ち寄る。米や粳、餅の契も婚礼に際してつくられた。

目的がもっぱら貯蓄にある日本の金銭モヤイの契では、その名のとおりに貯蓄契は契員が穀物など一定額を出資し順番に受け取り換金する仕組みである（伊藤、1977b）。しかし受給の順番と出資額があらかじめ決められている点は日本の頼母子や無尽の入札制とは異なる。また毎月ではなく年単位の出資もある。この他特に注目したいのは親睦目的で毎年一定額を出資し、それを積立て共有田（契田）を購入し共同耕作や小作料収入を

得て収益を分配する契である。これは日本のモヤイ田の仕組みに類似する（恩田, 2006）。このように貯蓄契には特定の出資目的を想定しないで、契員の共済のため計画的に受け取りの順番と出資額を決めるものがある。

特定の物品を購入するためにつくられた契では、先の鈴木の事例と同じだが、時代状況により生活水準の向上とともに金属食器を購入する食器契や茅葺き屋根からスレート屋根に改良する屋根改良契などが見られた。この他既に述べた発動機付き脱穀精米機を共同購入する発動機契や子弟の学業を支援する学契があり、これは農地を所有して小作料から先生への謝礼や学用品の購入など学費の捻出と書堂の維持管理をし、書物（教科書）の共同購入を目的とした冊契も残っている。親睦契は契員相互の親睦を目的とするが、年齢が比較的近い者、また共通の体験をもつ者が集まる契、軍隊仲間の軍友契、日帝時代の班長でつくられた班長契なども見られた⁽³¹⁾。親睦契は慶事や弔事で祝儀や不祝儀を出すことが多い。禁煙契は禁煙者の集まりで煙草代を積立て水田などの共有財産を購入した。この他忘年会をする忘年契、同じ年齢（同甲）で構成される甲契、兄弟がない一人っ子が集まる独身契などがある（伊藤, 1977a: b）。このように様々な生活面で契が互助組織として機能していることがわかる。

伊藤が調査した珍島では、上萬という行政村（上萬里）で当時まだ長老制度が残り長老の筆頭に位置する洞長が存在していた（伊藤, 2006）。村の長老を招集して村の秩序を乱した者に対して村裁判が行われた。私的な契の記録は残されることは少なく、公的なそれは村の契（洞契）や学校の契などで残り、トラブル防止のため農村振興会の契なども資産が記録に残っている⁽³²⁾。^{ヤンパン}両班の子孫による儒教的な色彩が濃い両班契もあった。この他珍島の村民が1950年代に寺の再建にあたり寄進のため古蹟保存契をつくり、その維持のため佛徒契を組織したことが記録として残っている（同上, 82-84頁）。また喪服の生地を工面する喪布契が珍島では1970年当時まだ残っていた（同上, 110-116頁）。

（2000年代）

現代の契は将来の多額の出費に備えた積み立ての契と利息目的の契に大別される。多く見られるものは前者ではチンモッケ（親睦契）などで、後者ではドンケ（金融契）が代表的なものである。以下筆者が聞き取りしたものを通して契の最近の動向について見ることにしたい。

釜山のような都市部でも契が隣近所や同窓会、アパートの住人、職場で行われ、その多くが利殖目的であることを聞いた（2006年9月聞き取り）。利息がよく2割のときもあったと言う。結婚式のとき友達どうしでお金を集めるときも契を利用する。ソウルでもたとえば若い人がペンションに泊まりに行くため皆で毎月々契でお金を集めるが、仲間内で不幸があるとそこからお金を出すこともある。高校生もわずかな金額を出して服やバックを契で買うが、これらは利息とは無縁の積み立ての性格をもつ。利息目的の契は金持ちの高齢者で多く行われていることを聞いた（2008年5月聞き取り）。全体とし

て契が行われなくなったのは人間関係がそれだけ希薄になったことと関係があると言える。農村部ではセマウル運動によって契が衰退したとされているが、ワンランク上の生活を満たす娯楽や遊びの都市の契と異なり、生活に密着した相互扶助の救済型の契から計画的な出費や突発的な支出に備えた共済型の契が主流になっている。日本ではまだ地方で頼母子や無尽が見られるが、韓国でも農協が補完や代替あるいは都会に出た息子が田舎に送金するなど生活条件が向上するとともに金融契が衰退しているのに対して、都市部で利息目的の契が健在であるのと対照的である。プサンのような大都市では商店街で行われ、金額が大きく投資目的でされている。総じて救済型ではなく共済型の親睦目的の組織が増えている点は日韓両国共通する。

島嶼地域では他の地域同様時代の趨勢や生活様式の変化によって契も変わりつつある。筆者が聞き取りをした珍島の細方里^{セパン}では、金銭を集めて順番に受け取る契の他に、子供の誕生や結婚式、親の60歳、70歳という節目の年齢の祝い金に備え親戚とするチンモッケ（親睦契）、また親が亡くなったときに手伝うホウサンケ（喪契）があった（2011年9月聞き取り）。特に後者は親と同居していないため町中で金銭を集めることが多い。かつて持ち逃げが少なくなかったことから、金額が大きいと担保として家を預けることもあった。珍島の金融契は落札が一般的なやり方で最初に受け取る人が多く払い、最後に受け取る人が少なく払う方式である⁽³³⁾。これをナクチャルケ（落札契）と言っている。仲間内の信頼関係に基づくことは言うまでもないが、持ち逃げする者も少なくないので近年する人が減り今はほとんど行われていない。むしろ銀行などの金融機関に預けて運用する人が多い⁽³⁴⁾。しかしチンモッケとホウサンケという冠婚葬祭に関わる契だけは行われている。それでもホウサンケはしだいに慣行が薄れ、やがてはなくなるものと考えられている。

島の漁村では仲がいい人や知り合いどうして魚を配ることも行われてきたが、しだいにこの種の互助ネットワークが弛緩しつつある。珍島郡の義新面では、日本の金銭モヤイに当たるお金を集めるドォンケ（トンケ、金融契）は現在行われていない（2012年3月聞き取り）。葬式のサンドッケ（喪布契）もあったが、今は死を迎えた病院で業者が葬儀の手はずを整えることが多い。それでも業者のところで手助けすることはある。旅行のために行うヨヘンケ（旅行契）は今も行っている。珍島は離島と異なり、都市化されているため互助慣行の消滅もそれだけ早いと言えよう。

新安郡のアワビがよく採れる黒山島ビ里では、親が亡くなったとき村民が集まってお墓を掘ったり料理の世話など葬儀を手伝うサンドッケがある。生活が一番困っている人が最初に受け取るチンモッケもあり、この他旅行のために積み立てるヨヘンケもある。黒山島郷土研究保存会の職員によると、サンドッケは韓国の伝統的な文化の中で全域的に行われてきた。この他アワビなどの海産物を必要する人が集まり、高い値をつけた人がせり落とすナクチャルケ（落札契）もあったが、今は見られない。お金を集めて最

初に受け取る人は利息が少なく最後にもらう人が最も利益を得るセマウルケは今も行われている（2012年3月聞き取り）。さらに貴金属の金だけを集めて落としていくバンジケ（指輪契）もある。同じ島の60代の女性は、葬式のときのサンドウケがあるくらいで、貴金属のバンジケ、お金のドンケ（トンケ）も、旅行のヨヘンケもなくなったのは銀行に預けるほうが利回りがいいからと言う。同郡の都草島ではお金を出す金融契はないが、米を出し合うコンブルケ（穀物契）があり、これは今も行っている（同上聞き取り）。これは農民がする契で、最後に受け取る人が一番多く米を手に入れる仕組みで、この日本の物品モヤイにあたる契も再分配的行為の特性を示している。葬式のときのサンドウケもある。^{ワンド}莞島郡生日面の徳牛島（里）ではお金を賭けてする契はなく、旅行契も今は少ない。しかしサンドウケは残り葬式で必要なお金や米を提供し、棺をかつぐのに13人ほどの労働力を必要としお互い協力している。

同じ新安郡の^{ハウイド}荷衣島（面）の60代の元婦人会会長によると、ドンケ（トンケ）の一種として春にニンニクやタマネギを売り、秋は米を売って換金した後行うチュンチュウケ（春秋契）が島の南のほうであると言う（2012年8月聞き取り）。14ある面のうち、一番自分たちのところが貧しいことも話してくれた。貧しいだけにこうした農作物を供出する契が行われてきた。

全羅南道内陸部の海南郡玉泉面では1950年代頃米で契を行ったこともあったが、現在は契自体が行われていない（2011年9月聞き取り）。結婚式や病気、怪我をしたときなど、金属の金を集めて契をすることがあった。銀行の金利が高いときはそちらで運用するが、それが低いときには金属の契が有利で利用されたと言う。現在こうした契もなくなり、チンモッケは親戚以外に同じ学校を出た人や同年齢で結婚式のときなど特別な日にするが、一般的な契とは別に行ってきた。家族が亡くなったとき世話をする契もあったが、これは今はない。それでもこの玉泉面の永信里では冠婚葬祭のときは今でもは生活上のつながりが強いとされる。順天市樂安面の東内里（樂安邑城）では、米を預けて生活に困っている人が最初に受け取る契もあったが、今はお金を銀行に預けて運用している（2012年3月聞き取り）。都市に近い内陸部の農村では島嶼部以上に互助慣行が衰退していることがわかる。

全羅南道の^{ヨス}麗水市華井面の沙島では契をしようとしたこともあったが、皆で相談してやらないことにした（2011年9月聞き取り）。これは人間関係が壊れることもあるため、島嶼地域で人口が少ないところほど、こうした小口金融が行われていないのは日本の沖縄先島諸島の鳩間島などの状況と同じである。麗水近郊の突山邑ユンリン里のソユル村では、かつて漁業と農業をしていた70代の男性によると、ドンケ（トンケ）の意味でタノモシ（頼母子）という言葉を使っていたと言う（2012年3月聞き取り）。これは30年くらい前の話で、今は銀行に預けている。村の人たち信頼できる者20人くらいで行い、20ヶ月かけていたが、60代の村長もタノモシケという言葉を知っている。しか

しお金をもらいそのまま逃げる人が出てくると、また銀行の利回りがよくなるとしたいになくなった。同じユンリン里のテウル村の60代の元村長も5, 6人でするタノモシを知っていた(2012年8月聞き取り)。また麗水市南面の金鰲島^{ヨス クモド}の60代男性もタノモシをドンケ(金融契)として使っていた。さらに新安郡安佐面の者羅島^{チヤラド}(里)や安佐島(里)でもタノモシの言葉を70代以上の女性が知っていた(同上聞き取り)。

済州島ではファンダンケと言い、現在には行われていないが、20年くらい前まではあったことを聞いた(2007年8月聞き取り)。それでも船や別荘を買うときにはお金でする契がまだ少しあると言う。女性が美容のときする契もある。金寧里では、お金を出し合い酒を飲み食べ物を食べながら親睦を深めるチンモッケと積み立てをして旅行する契がまだ残っているが、銀行に預金することが多くなった(2012年3月聞き取り)。60代の海女によると、海女だけでドンケ(トンケ)や旅行の契をしたこともあったが、最近にはしていないと言う。

〈日本の組・講と韓国(朝鮮)の契の比較—再分配的行為の互助組織〉

鈴木は日本の講がその後農家小組合、特に同業組合として発展することを述べ、そこには公共事業あるいは社会事業的な性格が少ない点を指摘している(鈴木, [1943b] 1973, 49-54頁)。この点に朝鮮の契との違いを認めているが、日本の村組が公共事業あるいは村落自治の機能を担ってきたと言えるだろう。日本には組がフォーマルな組織として公的な性格をもち、むしろ講はインフォーマルな任意の組織の色彩が濃かった(恩田, 2006)。従って契には日本の組と講の二つの性格を合わせもっていると考えられる。ただしこの組も五人組のような強制互助組織ではなく、自生的な共生互助組織としての組であることは言うまでもない。日本の講の特徴として地域的制限、共同社会的性質、冷徹なる合理性、各自出資の負担、対等の権利を鈴木は主張したが、契にもこれらが当てはまるとする。一部日本の無尽や韓国(朝鮮)の門契のように村落間のものもあるが、自然村内部で見られる点は共通する。また洞契や松契、学契など全戸を契員とし、伊勢講などほぼ全戸が講員となる点など共通するところも少なくない。

鈴木は講と契を比較するとき、集団としてではなく両者の制度的な側面、すなわち財物処理(財力による協力)の方式と対等な社会関係に基づく分配に注目すべきだとする(鈴木, [1943b] 1973)。共同社会的性格は会食に見られるように信頼と相互理解が秩序維持の基礎をなしている。冷徹なる合理性は財物をめぐる処理の公正と各自出資の平等な義務をさす。講と契の共通点は財物による協力の合理的制度で、「人間協力の合理的秩序」として平等実現の理想がそこに認められる。これらは講や契に見られる行為様式(再分配的行為)の共通性に他ならない(恩田, 2006)。契が互助組織として日本の講に相当する点はモヤイのいったん中央に集めそれらを再分配する行為特性から見るとさらに明確になる。それはユイやプマシの双方向性と違う中心性の行為志向で、後述する支援(援助)的行為の一方方向性とも異なり、一度集約したヒト(労働力)、モノ(物品)、

カネ（資金）を村民あるいはそのメンバーで分かち合う公平な仕組みである。しかしこれら行為様式は同じでも、その表れ方は儒教倫理の強い韓国（朝鮮）の農村と日本のそれは異なる。契を集団として捉えるのか、それとも行為様式から考えるのか、ここでは互助組織（集団）とその行為様式の分類を混同せず、組織の名称と行為の形態を区別しておきたい。

伊藤は先に述べた1970年代の契で村への居住を条件に世帯単位に加入がなかば強制される契と加入があくまでも任意の契に分類している（伊藤, 1977a）。特定集団を基盤とするものと個人の任意参加による分類だが、組織として前者は日本の組に後者が講に当たる。前者は地域社会に住む限り事実上加入が求められる組織で、自治組織や年齢階梯別組織、血縁集団に基づく。いずれも最末端の行政単位とは区別された伝統的な組織である。互助組織との関係では広く自治組織も相互扶助を目的の一つとしているが、また年齢別集団も血縁集団もそうした機能を有しているものの、組織の機能という点で後者の任意加入集団で特に相互扶助が強く見られたとする（伊藤, 1977b）。なおこれらの行為特性は繰り返し指摘してきたように、再分配的行為という日本のモヤイに相当するが、こうした行為特性そのものについて伊藤もそれほど述べていない。

以上契についての戦前戦中の朝鮮、戦後1970年代、2000年代の状況から、日本の講（組）と韓国（朝鮮）の契についてまとめると、組がフォーマルな組織としてその分公的な性格をもち、講がインフォーマルな任意の組織という性格が強かった互助組織双方の特性をもつ集団が契と言ってもよいだろう（表2-3：『日本の講（組）と韓国（朝鮮）の契』参照）。世帯単位で加入が義務づけられる洞契もあれば、任意加入を前提にした物品購入の契や特定の仕事集団の職業契、葬礼のための喪布契などもある。集団内の行為特性としてはヒト（労働力）、モノ（物品）、カネ（資金）を中央に集め、それを組員や講員、契員に分配し直すという中心性の行為が見られる。韓国の契には儒教倫理が反映され、特に門中関連の契は集団としての凝集性が高い点が指摘できる。契は何よりも契約組織としての契であり、地域住民間の信頼が基本となる社会関係によって支えられている。日本では会がつく様々な組織がつくられているが、それと同じように契も数多くの組織として一定の目的を果たすため機能している。

(3) 支援（援助）的行為

①朝鮮の労働奉仕—コンクル、プジェ（コジョ）、プゲン

相手から見返りを求めないテツダイに相当する韓国（朝鮮）の言葉は日本同様多岐にわたる。鈴木によれば、コンクル（共社、共屈）は有償である除草の手伝いで、これには労賃が出た（鈴木, 1958）。同じコンクルでも重病や初喪のとき、必要な労働力を無償で提供することもある。京畿道安城地方では寄付を意味するプジェは不幸があったときヒト（労働力）、モノ（物品）、カネ（資金）で贈り物をするが、僧侶や寺に対しても

表2-3: 日本の講(組)と韓国(朝鮮)の契

日本の講(組)	韓国(朝鮮)の契
<ul style="list-style-type: none"> ・組—フォーマルな互助組織 <ul style="list-style-type: none"> ・ユイ組, 不幸組, 葬式組, 若者組, 娘組など ・地域住民である限り加入が求められる組織 ・講—インフォーマルな互助組織 <ul style="list-style-type: none"> ・宗教講, 経済講(頼母子, 無尽) ・地域住民として加入が事実上求められる準フォーマルな組織 ・集団内の行為特性 <ul style="list-style-type: none"> —ヒト(労働力), モノ(物品), カネ(資金)を集約する再分配的行為 	<ul style="list-style-type: none"> ・契—フォーマル性とインフォーマル性双方の要素をもつ互助組織 ・目的—公共事業, 産業振興, 貯蓄, 娯楽 ・フォーマルな契 <ul style="list-style-type: none"> ・洞契, 門(中)契, 美浴契, 水利契, 松契, 殖産契, 同業契(漁業契, 農契)など ・インフォーマルな契 <ul style="list-style-type: none"> ・金融契(契田の共同購入により収益を分配する貯蓄契他), 穀物契(米, 麦, 豆), 婚葬契, 親睦契, 物品購入契(食器契, 発動機契)など ・儒教倫理による集団の凝集性が高い。 ・集団内の行為特性 <ul style="list-style-type: none"> —ヒト, モノ, カネを集約する再分配的行為

行われた。同じ行為は全羅北道全州地方ではコジョと言っている(同上, [1943b] 1973, 445-455頁)。コジョは無報酬の手助けで, 部落内の有力者の家を建てるときにもこのコジョが行われた。この他地域(下雲面明川洞)によってはヒヤンド(郷徒)という祭事るとき各戸から出る労力奉仕もあった⁽³⁵⁾。

ブゲン(附近)は家の新築や病人, 困っている家に対する無償の労働奉仕である。このブゲンは日本のテツダイにあたり返礼を伴わない行為である。家の建築や病人の家で手助けするが, こうした支援を指導する尊位がいて自然村(洞)の長老格の人がなり, その補佐をする者が若い公員である。このブゲンはもともと附近として部落あるいは洞の意味をもっている(鈴木, [1943e] 1973, 456-459頁)。ブゲン単位で山をもつことが多く, これが共有地(コモンズ)として維持管理された。既に述べた共同作業としての村仕事には道路や橋梁, 井戸, 洞舎(日本の寄合の場所に相当), イドサラエなどの作業があった(同上, [1943b] 1973, 84頁)。これら村仕事については洞祭り前後に開催される区長あるいは部落長を中心とした洞会で決められることが多い。こうした共同作業への参加は地域住民として当然の義務とされたのは言うまでもない。

1930年代に済州島を調査した泉によれば, 日本の若者組に相当する青年会の組織があり, それは男子のみの組織で20歳から40歳までで, 相互扶助に加え知徳の修養, 体育の奨励, 弊風の矯正(巫女の撲滅など)を行い, 青年契では当時月に10銭集め会員や会員の父母が亡くなったときの弔慰金を出し, 書堂の改修費用に充当したとされる(泉, 1966, 158-160頁)。同様に女性の組織として婦人会が漁村で海女の裸潜漁場の保護, 海女どうしの内紛の調停をし, 他村との紛争には一致団結して対応した。なお海女の収入は漁場の管理や用水井の修繕費用などにも充当された。

②韓国の労働奉仕—ブジョ（ブジョ、ブジェ）、ドゥム

以下2000年以降の韓国での聞き取り調査から、日本のテツダイに当たる言葉とその意味について冠婚葬祭の手助けを中心に見ることにする。珍島の智山面細方里^{セバン}の元里長によれば、先に述べたコンクルやプゲンという言葉は聞かないが、見返りを期待しない手助けはドゥンダ（助）という言葉を使う⁽³⁶⁾。廟をつくるとき集まって手助けすることがよくあった。現在は家ではなく病院で亡くなる人が多いので、4、5年くらい前から自分たちで葬儀をするよりも業者に任せることが多い（2011年9月聞き取り）。結婚式は若い男性が都市に出ているので、彼らの好きなところで式を挙げることが多く、珍島に戻って披露宴をする者もいる。今では業者が町から食事をつくって持ってくるが、皆が集まって食事をするのが楽しみで、契とは別に祝い金を出す行為も互酬的なブマシの一つと考えている。総じて地域社会の結束の弛緩、伝統に基づく拘束からの離脱の傾向は日本の村落社会と変わらない。

相手から見返りを期待しない冠婚葬祭の手助けは多くされるが、新安郡の黒山島ビ里では結婚式を木浦^{モッポ}で行い、葬儀は入院していた人は都市ですが、地域で行うこともある。いずれもサンドツケ（喪布契）で必要な手助けをしてきた（2012年3月聞き取り）。黒山島郷土研究保存会の職員によると、先に契のところで述べたサンドツケで今も葬儀の手助けをしている（同上聞き取り）。同郡の都草島では、農業以外に海産物もあるので特に生活に困っている人は少ない。また農業をする若者も多く、機械を使って高齢者を助けている。収穫した米の6割を高齢者が受け取り、手伝った若者が4割をだいたいとする仕組みになっている（同上聞き取り）。麗水^{ヨス}の都市部に近い突山邑ユンリン里ソウル村の70代の男性によると、葬儀も結婚式も地域で行っていたが、今は麗水で行うと言う。順天市樂安面の東内里（樂安邑城）では、伝統的な結婚式をする人もいるが、今は地元でする人はいない（同上聞き取り）。それでも釜山のような大都市で人が死んだときの見舞金や祝い金を出す場合は「ブジョ（ブジョ、ブジェ、早盂、扶助）をした」と言い厚い手助けがされている（2006年7月聞き取り）。

済州島では結婚式を新郎新婦の家で3日くらいかけてするが、これは島独自のお祝いである（2007年8月聞き取り）。葬式は土葬と火葬が半分くらいあり、3日から4日かけて行っている。契員と言われる住民が葬儀のいっさいを手伝う。結婚式は式場ですが、帰德里の一里という集落ではお互いに世話をしてきた。なおブジェは現在お金のやりとりで使うが、かつては麦をもってくるものがあつた。「会館」という組織があり、村民が集まりいろいろなことを相談するが、そのとき唄を歌ったり会食もする。その際里長が里事務所では何月何日には集まりがあるという放送のアナウンスをする。済州島の金寧里の里長によると、葬儀は業者に任せるが結婚式はまだ地元で行う場合があると言う。60代の海女の話では、自分は結婚式を地域でしたが、今は都市でする人が多い（2012年3月聞き取り）。済州島ポパン里の40代女性職員によると、青年会（チョンヨン

へ)と女性(婦人)会(プニョへ)で祭りのときや一人暮らしの高齢者に対してキムチや米を提供したり、両親のいない子供たちの手助けをしている⁽³⁷⁾。この点は泉が調査した戦前からの伝統が引き継がれている。これはどの里でも行われ、また半島の都市部でも活動がされている。これは日本の村落でかつて見られた若者組の活動と同じで、こうした若者が様々な互助組織の担い手になっている(2012年3月聞き取り)。

③日本のテツダイと韓国(朝鮮)のプジョ(プジョ, プジェ), ドウム(ドウンダ) —支援(援助)的行為

このように村落は相互扶助を通して社会の秩序を保ってきた。逆にこの互助システムが制裁システムによって支えられている点は日本の村落と同じと言える。慶尚北道の安東市郊外での村落では刑罰を科された人が払った罰金は村の共同募金として村民のために使われる(2007年8月聞き取り)。村落は誰でも手助けを受けられる平等な社会であったことがわかる。そこでは機会均等の「平等な自由」を実現する自浄作用が制度化されてきた。その一方であえて有力者(豪農)の存在を通して不平等を容認する「格差原理」が支配し、テツダイにより庇護を受けるタテの社会関係が維持されてきた。ロールズは正義の諸原理として社会(制度)レベルで「平等な自由」に対して、「格差原理」も唱えた(Rawls, 1999 [1971])。さらに個人レベルの正義として各自の役割を自発的に果たす責務(協働)という公正な原理に加え、自然本性的な積極的義務として相互扶助を指摘している。ここに「ムラ社会の正義」があった。格差では日本のほうが韓国よりも有力者を容認する度合いが強いと言えるかもしれない。そうした社会構造を受け入れながら、全体としてテツダイは相手から見返りを求めない行為として支え合いの社会システムの一翼を担ってきた(表2-4:「日本のテツダイと韓国(朝鮮)のプジョ(プジョ, プジェ), ドウム(ドウンダ)」参照)。互助慣行の衰退とともに使われなくなった言葉がある一方で、現在ドウム(도우, 助力)などを中心に手助けする(돕따, 돕다)という一方向の支援(援助)的行為に関わる言葉が広く用いられている。

表2-4:日本のテツダイと韓国(朝鮮)のプジョ(プジョ, プジェ), ドウム(ドウンダ)

日本のテツダイ	韓国(朝鮮)のプジョ, ドウム
<ul style="list-style-type: none"> ・テツダイ(カセイ, 스케) ・相手から見返りを期待しない行為(慶事と弔事の手助け)。 ・若者組のテツダイが地域社会の互助システムの中核を担ってきた。 ・ヨコの互助関係だけでなく、タテのそれも有力者との関係で見られた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・プジョ(プジョ, プジェ)—無償の手助け(贈与) ・不幸があった家への贈与 ・有力者の新築の手助け(タテの互助関係) ・ドウム(ドウンダ)—無償の手助け, 助力 ・儒教精神に基づく青年の高齢者に対する手助け(青年会や女性会の活動)。 ・コンクル—有償・無償の手助け ・除草(有償), 重病や初喪(無償)の手助け ・プゲン—無償の手助け ・家の建築や病人の家, 困窮家庭への支援

3. 韓国の互助慣行の特徴

(1) 儒教精神に基づく相互扶助

①郷約と儒教精神

日本では共生互助組織が為政者の強制互助組織とされることが多かったが、互助組織は地域社会で自生的な社会秩序として機能してきた（恩田, 2006）。鈴木は戦前の朝鮮での調査を踏まえ、日本の農村のほうが集団としての感情的融和や一体性において強く、朝鮮のそれが個人主義的であるとした。この点は日本のシマ社会の集団主義と朝鮮の半島主義の個人主義を対比させて考えることができるだろう。しかし韓国のそれは中国で見られる大陸の個人主義ほど強くなく、契約組織としての契と個人が結ぶ関係は、集団の中に包含される個人の合意と異なり、あくまでも個人と集団との契約関係というゆるやかな（柔らかい）集団主義として個人主義をもち合わせているように思われる。日本では個人の論理より組織の論理が優先されるが、これは私を減却して公を優先させる「減私奉公」を意味する。これに対して韓国（朝鮮）は組織（契）の論理に対して平等互恵の契約関係に基づく個人の論理がより尊重されると言ってもよいだろう（表3-1：「日本の互助意識と韓国（朝鮮）の互助意識」参照）。

集団内部の一体感は強くても、個々人の置かれた位置（位座）を守るという点で個人主義の色彩が強いため、その分自然村としての感情的融合や一体感の意識は低いとされる。この点鈴木は次のように述べている。「個人の位座がいちじろしく固定し個人の位座が厳に守られている意味において個人主義的である。冷徹な位座の組織が村人等の社会過程における情熱の興奮に常に制肘を加えているようである」（鈴木, [1943b] 1973, 88頁）。こうして生活協同体としての統一性が日本の自然村よりも低いとされてきた。この点は支持できるが、契の多様性からわかるように公的な制度保証がないところで生まれた自生的な社会秩序としてそれは広く地域社会の秩序を維持する「生活の知恵」から生まれた土着の制度である。この秩序を強化してきたものが儒教であった。この点日本では儒教、仏教、神道が融合した「日本的倫理」が互助社会の秩序をつくってきたと言えよう。

表3-1：日本の互助意識と韓国（朝鮮）の互助意識

日本	韓国（朝鮮）
<ul style="list-style-type: none"> ・ 集団主義（硬い集団主義） — 個人の論理より組織の論理が優先される（減私奉公）。 ・ 互助社会の秩序 — 儒教、仏教、神道が融合した「日本的倫理」 村決めによる規則制定 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 個人主義（ゆるやかな<柔らかい>個人主義） — 組織（契）の論理に対して平等互恵の契約関係に基づく個人の論理も尊重される。 ・ 互助社会の秩序 — 儒教倫理の生活規範 郷約（洞約）による規則制定

地域には一定の約束事があり、それは郷約や洞約と呼ばれた。里では自治法とも言われる（2011年9月聞き取り）。地域社会の約束事を定めた郷約は中国宋代のものが移入されたという（鈴木, [1943b] 1973, 80-86頁）。これは「徳業相勸^{すすむ}、過失相規^{ただす}、礼俗相交^{まじわる}、患難相恤^{あはれむ}」によって風俗の良化と隣保共助を進める規約である。それがまた強制的に相互扶助を奨励した。日本の五人組に当たる五家統があったが、これは官制組織であった。郷約を維持するための規則はそれを励行する道徳的な自治組織によって担われ、洞約と称されたところもあるが、戦前戦中の朝鮮においては儒教の実践道徳を示すものとして重要であった。この郷約契の組織は両班儒林の有力な門中が中心となり、洞約は郡より下の単位で機能し一般の部落でも郷約が制定された。珍島では上に立つ者が下の意見も聞きながら物事（郷案郷約）を決めた。これは18世紀（1770年代）から記録が残り、「一郷一面」として面単位にあったことがうかがわれる（呉・朴, 1988, 347-348頁）。自治法としての郷約の内容には罪人の罰則規定があり、日本の村落同様互助システムが制裁システムによって支えられていることがわかる。組織化されずまた明文化されていなくても、村落の秩序を維持する郷約の精神が様々な制裁を通して浸透していた。

一般の部落民にとって郷約は儒教倫理の生活規範として社会意識を拘束する機能を果たした（郷村社会史研究会, 1996）。こうして強固な互助システムがつくられてきたと言えよう⁽³⁸⁾。1960年代には『農村指導論』（蔡・趙・金, 1966, 43頁：422頁：441頁）などを精読した者が農村のリーダーとして活躍し、農業技術を中心とした農業開発だけでなく、郷約に基づく生活や生活改善の指導など社会開発的な取り組みを行った。これは同年代に国連が提唱した社会開発の流れに沿うが（恩田, 2001）、この種の本が農村開発の教科書的な役割を果たし、グループごとに指導がされ村落が発展していったと推測される。この時期の本はまだ漢字とハングルの併用だが、その後ハングルのみの使用が奨励され民族意識がさらに高揚していく⁽³⁹⁾。こうしてさらに韓国式の隣保共助が維持されてきたと言えよう。

②相互扶助に見る儒教精神

鈴木は戦前朝鮮の農村社会では、儒教文化と同族組織が重要な役割を果たしているとしたが、それは自然村である洞（旧里洞）を超えた旧郡の社会的統一性を規定するものと考えた。すなわち朝鮮の契が儒教倫理を実践し儀礼と契約を重視する農村において自然に発生してきた点に鈴木は着目している（鈴木, [1943b] 1973）。特に男女の別、長幼の序をめぐる厳しい道徳観から、血縁関係における相互扶助のみならず、地縁関係のそれにおいて強い。一方伊藤は1970年代の珍島の調査から、契が家族および村落生活を安定させる役割に注目している。しかも契への参加が複数ある点、またあくまでも個人の自由意志に基づくことを強調した（伊藤, 1977b）⁽⁴⁰⁾。そこにも硬い集団主義よりもゆるやかな個人主義を見ることができだろう。なお既に述べたように韓国の契は、日

本の村落のようにフォーマルな義務として加入が求められ世帯が単位となる組とインフォーマルな任意参加で個人が加入単位となる講に分かれているわけではない。

強い儒教精神は喪布契に代表されるように子が親の葬儀の支出に備えた目的意識が強い互助組織に見ることができる（伊藤, 1977a）。韓国の本家分家関係では長男が父の祭祀、次男が母の祭祀を受け持つことが慣習とされる。日本では子が親の葬儀に備えるというよりも、葬式組や不幸組などがつくられ一般的な葬儀に伴う非常時の体制がつけられる。それは親に限らず、不慮の死に対する地域社会全体の備えで、この点にも日本の集団主義が韓国の個人主義的な対応と違うことがわかる。また長幼の序（原理）は両国いずれも重んじるものの、相互扶助という点でその程度の差というよりも韓国のほうが年功序列に基づくタテの社会関係が互助行為を規定する度合いが大きい。なお村外への互助関係は限定され、村内では特定少数の相手よりも多くの人と関係をもつことが韓国では多いとされる（同上）。この互助圏の広狭という点では、村落外に対してウチとソトを区別する共属感情はむしろ日本のほうが強いように思われる。

（2）同族意識と隣保意識に基づく相互扶助

①タテ（門中内）の互助関係

〈門中と相互扶助〉

伊藤は韓国の村落を同姓の特定の門中（父系親族集団）が中心で流動性が少ない同族部落と雑姓でいくつかの門中から成る地域外との流動性が高い雑姓村落に分けている（伊藤, 1977a）。門中が相互協力の単位となるものの、さらに小さな単位（派）が門中契のメンバーを構成する。契員がそれほど大きくないのはメンバー間で給付を常に一定に保つ目的もあった（同上, 1977b）。これは日本の村落が共有地（コモンズ）を維持するため、持ち株数を制限してきた事情と類似する。戦前戦中両斑と常民^{サンミン}では前者の同族意識が強く、同族で組織される部落では書堂が同族団体の契によって維持され、同族組織の門契が様々な事業を行っている（鈴木, [1943b] 1973, 75頁）。特に互助組織としては貧困子弟の奨学金を出すなど、また扶養者のいない遺児の養育や困窮者の救済をし、さらに敬老活動も実施している。この他同族の集会所や共同の倉庫や作業場、販売所、井戸、浴場、洗濯所などを設け村落共同体を維持している。このように門中の互助組織の門契が全体のセイフティネットの役割を果たしている。その基底には既に述べたように儒教の強い精神が作用し、地縁組織の互助システムを補完する血縁組織による重層的な互助社会の構造が見られる。

〈門中の共有地（コモンズ）〉

門中がもつ共有地（コモンズ）は常に有効活用されてきた。珍島には門中の土地があり、同じ門中内の生活に困った人に土地（田）を貸して、その収穫を得て生活する仕組みが見られる（2011年9月聞き取り）。その土地を借りた人は無償で耕す代わりに、一

定の義務を負う。それは祖先の廟（墓）の維持管理で、この種の土地を借りて利用する人をサンジギ（산지기, 山持己）と呼ぶが、これは「山を守る人」の意味をもつ。文字通り、門中の土地（山）を守ることを条件に利用することができる⁽⁴¹⁾。利用する土地をサンジキタ（山持己田）と言う。門中という一族内の共助が強固な互助ネットワークをもっていることがわかる。珍島では全体の6割がこうした門中の土地となっていると言う。同じ門中の知り合いの中で土地の貸借が行われ、土地を利用する期間は特に決まっているわけではない。これは一定の生活のメドが立つまで借りられることを意味する。今もこの制度は続いている。これに対して里（村）がもっている共同の土地も同様な使い方をされることもあるが、代表者（里長）に収穫物を地代として納める。門中の土地と違いそれほど大きくはない。内陸部の珍島郡義新面でも、こうした門中が共同でもつ土地を貸して山とお墓を守るサンジキのことを聞いた（2012年3月聞き取り）。

海南郡玉泉面の永信里でも、門中の土地を借りる人をサンジギと言う（2011年9月聞き取り）。もともと家僕（召使）への土地貸与もあったが、農業ができない人に対して土地を貸す仕組みは借りる期間に制限はなく生活を立て直すまで利用できるが、土地を借りた人は義務として門中の墓の管理をする。近年都市に住む人たちが普段離れていて墓地の維持管理ができないため、門中外の人が土地を借りた務めとしてその代わりを果たすこともある⁽⁴²⁾。こうして山を守る意味をもつサンジキは先祖から続く墓を守ってきた。順천시楽安面の東内里（楽安邑城）で暮らす70代の女性も、門中の土地を同じ門中の人に貸して生活を立て直すことを知っていた（同上聞き取り）。

新安郡の黒山島ビ里では、門中が共同で所有している土地を信頼できる人に土地を貸し山とお墓を管理する人を同様にサンジギと言っている⁽⁴³⁾。門中で共同基金を設け、山の土地を買うことで墓の維持管理も行われてきた。黒山島郷土研究保存会の職員によると、もともと罪人が流されてきた黒山島では門中が都市に比べると少ないが、サンジキは門中の土地を借りる代わりに山を管理する人で、これは全島内で見られたと言う（2012年3月の聞き取り）。同島の60代の女性は門中を大切にしない人が増えてきたので、サンジキもやがてなくなるかもしれないと心配していた（同上聞き取り）⁽⁴⁴⁾。なおこうした門中の制度はどこ地域でも見られるわけではない。同郡荏子島（面）では聞かない⁽⁴⁵⁾。サンジギも門中の系譜を守り続けている地域でのみ存続していると言えよう。

②ヨコ（地域住民間）の互助関係

〈契を中心とした互助ネットワーク〉

契の基本精神は平等と互恵にあり、その組織と世話役的役割を果たすリーダーが村落の協調と連帯の維持に貢献してきた。基本的に一年輪番制の経理担当の任司がいて、1970年代当時出資額あるいは受給額は現物による等額とされてきた（伊藤, 1977a）。そ

のメンバーは信頼関係が基本にあるため、個人的に親しい関係にある同年齢層を中心とするが、必ずしも親族関係に限られるわけではない。親戚や近隣の関係にとらわれない信頼と協調から契のメンバーが選出された。契への参加は「契をもっている」という表現で示されるように、一人が複数の契に加入するのは日本の講と同じである。日本に比べ、喪礼や婚礼のように長期的な視野すなわちライフ・サイクル上の支出に備えた契への参加が多いように思われる。

門中というタテの系譜に基づくウチとソトを区別する共属感情が強いフォーマルな血縁関係（階層原理）に対して、契は門中外という意味でのソトにおけるヨコのインフォーマルな非血縁関係（平等原理）に基づいている。このバランス関係のうえに成り立つ社会システムを韓国はもっていると言ってもよいだろう。従ってこの契のネットワークが逆に門中間の利害関係や緊張関係を緩和し抑制する作用があったとする（伊藤, 1977a）⁽⁴⁶⁾。これは国家主導の強制的な相互扶助ではなく、自生的な相互扶助が強かったことを意味する。またこの平等原理に基づく契は突出した個人の存在を抑制する効果があり、そこには集団指導的な性格が読み取れる。ただ先に述べた個人主義が決して硬い個人主義ではなく、ゆるやかな（柔らかい）個人主義であることがわかる。さらにそれは異年齢間また異世代間の意思疎通にも貢献していた。もちろん儒教倫理に基づく長幼の序を重視する門中を超えた対等な契のネットワークが見られる一方、旧両班層から成る同族部落では門中単位にそれが強固に見られた⁽⁴⁷⁾。

各種の契は地域住民間の互助制度として機能したが、その一方で中国の朱子によって始められたとされ、非常に備え穀物を備蓄しまた貸し出しをした社倉や義倉など官制互助が李朝以来行政主導の社会保障として存続し、これらが官吏の横領手段となるなど十分機能せず永続することがなかった。こうした強制互助制度に対して、契という自生的な社会秩序としての互助慣行が村落内のセイフティネットとして果たした役割は大きい。それは契のメンバー間の信頼関係によって支えられたが、葬礼や婚儀のような村落のしきたりは自分の家だけ簡素にすることもできず、社会体面上からも契に加入することで不測の事態や人生節目の行事に備えることができた。これらは村民の生活に欠かせない互助ネットワークとして「生活の知恵」から生まれたものであった。

〈隣保共助の範囲〉

伊藤が調査した珍島では経済格差も少なく、プマシも含めて平等で互恵的なネットワークがあった（伊藤, 1977a）。従って、そこでは日本のテツダイのような明確なパトロン・クライアント関係を内包する構造は見られないとする。長幼の原理が強い反面、その原理を求めない同年齢間の社会関係では羽目を外したきわめて柔軟な対応がされている。同じ年齢層で特に親しい「同甲」関係がタテの門中に基づく社会関係の緩衝的な役割を果たしたと言えよう。仲間によってつくられる甲契は同年齢の親睦を目的とした契で数か村にまたがることもあった。いずれもメンバーは10人前後で構成され、仲間内

の親睦と和が適正に保たれた。多数の契に重層的に参加する者も多いが、複数の契に入る者が互助ネットワークの結節点となることが少なくない。門中を越えた互助関係は門中内の結束とは別にヨコの互助ネットワークとして隣保共助の範囲を広げるのに貢献している。

既に述べた日本の五人組に相当するものが五家統で、これが「五家統節目」という規則をつくっていたことが『朝鮮総督府月報』（明治44年）に残っている（鈴木, [1943b] 1973）。この制度が日本同様中国からもたらされたとされるだけで、鈴木が調査した戦前に制度としては残っていない。また日本の五人組帳前書にはその規則が詳細に記されているが、朝鮮の「五家統節目」にはそれほど詳しく示されていない。強制互助組織として国家行政の補助機関として機能した点は共通する。一統は五戸で構成され統ごとに統長がいたが、五家を一単位とするのではなく部落全体がその単位として機能していたとする。鈴木が調査した戦前植民地期の朝鮮部落は日本のそれよりも小さいため、日本では隣保の社会圏が部落のさらに下の集落単位において見られたが、朝鮮では部落それ自体が一つの隣保圏を形成していると見なした（同上, [1944] 1973, 315-316頁）。

朝鮮では日本ほど小地域の社会的統一を基礎とした信仰対象がないとされる（鈴木, [1943b] 1973）。この点、鈴木が調査した江原道原州郡地正面良峴洞では世帯数60戸が8つの小地域に分かれ、日韓併合まで続いた「五家作統」（相互監視）の名残に基づく集落が形成されていた。八つの組で隣保共助が形成され、節句などの時期で贈答が行われた。弔事では組内を超えて洞内各戸から一人出たが、慶事では親族と親しい人のみが手助けした。プマシもまた必ずしも組内単位ではない。他の地域では慶事で組内のものだけ出るところもあるが、一つの組を構成する世帯数により隣保共助の範囲が異なる。結局統一的な社会意識が保たれている圏内で互助ネットワークが形成されていることがわかる。既に述べたコンクルでは洞内の者全員が重病者や初喪の家の耕作の手助けをし、婚儀や葬儀の道具類も洞単位で保管し共同利用した。こうした隣保共助の範囲から鈴木は日本では村落内の組が互助単位であるのに対して、朝鮮では村落自体、すなわち部落としての洞が一つの互助集団を構成していたとした。しかし必要とする相互扶助の内容によってネットワークの広狭に差が出てくるものと考えられる。

③韓国の互助社会の構造

儒教に基づく長幼有序の倫理が支配的な韓国では、タテの社会関係では互助行為が目上の者に対する当然の行為とされ、ヨコの対等な関係では各自の個人生活が尊重される。ここに先に述べたゆるやかな（柔らかい）個人主義が見出せる。その分同じタテの系譜につながる同族として門中内の互助関係は強く、地域社会における上下の身分や長幼の関係を重視する儒教意識と結びつきやすい。その一方で同族の帰属意識でつながるヨコの門中一体感から、強固な互助関係もつくられてきた。既に述べたサンジギ（山持己）

の制度による生活困窮者への土地貸与などに見られるヨコの互助ネットワークがそれぞれある。儒教的道義による秩序の維持に加え、同族（門中）の平等，互惠の互助意識に基づく共同社会がつくられてきた。この点日本の同族（親戚）の血縁意識以上に強いものがある。他方で同じ地域社会に住む隣保の地縁意識あるいは同窓などの親縁意識からヨコの互助関係が生まれているのは、これまでプマシや契の紹介で述べたとおりである。労力交換や共同作業，葬儀の手助けなど，様々な生活領域で互助関係が見られ，それらの多くは互助組織としての契を通して行われている。さらにヨコの互助関係だけでなく，地域の有力者や上下の身分を前提にしたタテの互助関係も日本に比べると少ないものが見られる（表3－2：「韓国社会の互助関係」参照）。

以上のように同族意識と隣保意識にはそれぞれタテとヨコの互助関係が見られるが，あえてその両意識の特性を際立たせると，同族として門中のタテの社会関係と隣保として地域住民あるいは類縁の仲間としてのヨコの社会関係のバランスのうえに韓国の互助社会がつくられていると言えるだろう（図3－1：「韓国の互助社会の構造」参照）。いずれも儒教倫理が両意識に浸透している。当然地域によって大きく異なり，儒教倫理を早くから受け入れた中部から東南部の内陸部では，両班層と常民層が明確な地域で両階層間にパトロン・クライアント関係による共存がある一方，同一階層内ではヨコのネッ

表3－2：韓国社会の互助関係

血縁，地縁，類縁	タテの互助関係	ヨコの互助関係
同族意識（門中社会）	同じ系譜（血縁）につながる相互扶助	同じ門中内の相互扶助
隣保意識（ムラ社会）	地域内の上下関係による相互扶助	地域住民としての地縁による相互扶助
親縁意識（マチ社会）	先輩・後輩など類縁関係による相互扶助	同郷，同窓など類縁関係による相互扶助

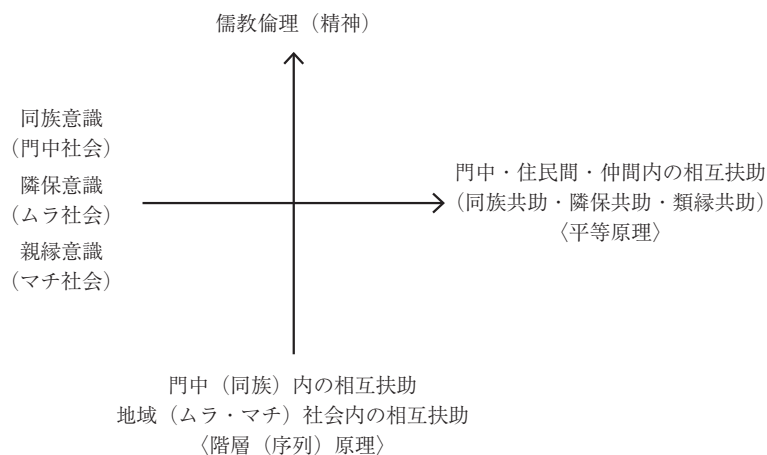


図3－1：韓国の互助社会の構造

トワークが逆に強いとされる（伊藤, 1977b）。常民層中心の雑姓部落では相互に生活を支える契が重要な役割を果たしたが、有力な地主層や両班層が形成されることが少なかった島嶼部では両班と常民との階級意識が弱く、それだけヨコの互助関係も強い。このように儒教倫理と父系血縁の原理の結びつきが強い門中社会では同族別の互助ネットワークが見られるのに対して、地縁関係のムラ社会や類縁関係などのマチ社会では住民や仲間内のセイフティ・ネットが張り巡らされてきた。

4. 韓国と日本の互助慣行の接点

(1) 互助慣行に見る韓国と対馬のつながり

①韓国と日本の交流

朝鮮半島と離れた済州島では済州独自の契の言葉が少ないことから、互助組織としての契が半島から伝わってきたことが推測される（泉, 1966, 159頁）。契が中国の合会（フイ、会）との関連が指摘されていることも、互助慣行が国や地域を越えた普遍性をもつと同時にその仕組みの伝播が想起される。対馬が朝鮮半島から日本への様々な文物の通路になったことは間違いのない事実で、壱岐と並び日本へ回廊として重要な役割を担った。朝鮮半島と地理的に最も近い点で、特に対馬がもつ地政的な役割は歴史上大きかった⁽⁴⁸⁾。両国の交流は歴史的に古く、そのうち中世の外交関係は申叔舟の『海東諸国紀』（1471）などに詳しい（宋, 1420：申, 1471）。日本各地の封建諸侯の動静を田地の大きさ（町、段〈反〉）の記述とともに、「遣使来朝す」あるいは「遣使して来り」、「宗貞国の請を以て接待す」という文言が繰り返し使われ、朝鮮の漂流人を含め外交関係を維持するため日本各地から使節を受け入れたことがわかる⁽⁴⁹⁾。こうした交流は為政者レベルで各種制度の受容がされ、庶民レベルの生活様式の伝播はなかったのだろうか。漂流人を通じた交流があったようにも思われる。近世以降朝鮮通信使の来日に加え、釜山の倭館が日本と朝鮮の外交通商の場、使者の応接所、宿泊所、貿易所として約500人の対馬人が居留し、その任にあたっていたことも興味深い（下蒲刈島朝鮮通信使資料館）。

新安郡都草島の60代の男性（面議会議長、面議員）によれば、日本の文化がこの島を始め韓国に多く残り、それは悪い面もあれば良くない面もあると言う。前者は土地制度で、かつて土地は国有地であったが、日本が統治したとき土地が私有地化され、日本が会社をつくり細かく測量して土地を分配した（山辺, 1971, 32-39頁）。日本に貢献した人々には土地が多く提供された点を指摘している。その土地をまた転売することもあった。この点国が道路をつくる時土地が私有地であるため島の開発を妨げたと言う。良い面は日本により電車が導入され近代化された点である⁽⁵⁰⁾。なおプマシヤ契も韓国への日本文化の影響として残っているとこの男性は言うが、この点はさらに詳細な検証が必要である。

②対馬の互助慣行

以下戦前から朝鮮との関係が深かったとされる対馬の西泊^{にしどまり}と鰐浦^{わにうら}の地区を中心に互助慣行を韓国と比較検討することにした。特に山が多い対馬の北に位置する比田勝の西泊集落は地形的に閉鎖的な社会を形成してきた⁽⁵¹⁾。しかし富山の薬売りがここまで来ていたことはあまり知られていない。無料で泊めた民宿もあった。ユイを対馬ではカタヨリ（片寄り）と言い、比田勝周辺の集落では三軒カタヨリあるいは二軒カタヨリとして、芋掘りやサツマイモの収穫で隣家が労力交換をした（2008年2月聞き取り）⁽⁵²⁾。西泊の共同作業では23戸がミチツクリで牛に土砂を背負わせ道路整備をした。これは単なる奉仕にとどまらず、弁当持参で親睦を深める楽しみでもあった。同じ生業では仲間意識が当然強く、農道ができる前の堆肥出しの道路補修、神社やお寺の掃除、今もある川の清掃などは仲間仕事で行った。一般に沖に立てた立網では個別に出漁することが難しく、漕ぎ手となる4、5人の船で共同作業をする。網は個人所有で各自網にかかった分が取り分とされ、また四ツ張網や折子網（権利をもつ本戸のみ）も共同作業で行った（田川, 1988, 37-38頁）。カタヨリや仲間仕事、相手から見返りを期待しないテヤリ（手やり）という互助行為に対して、労賃を払う市場的行為としてヤトイイレ（雇入れ）があった⁽⁵³⁾。水田の多い家への手助けはテヤリで薬や米の提供を受けることもあるが、食事だけはテヤリを受けたほうが出す。

西泊の講は10年ほど前まで5千円や1万円出して10人から15人くらいで毎月行っていたが、必要な人から受け取り、その後は入札やくじ引きをした。島の共有地（コモンズ）はないが、富ヶ浦の集落（10戸）の3名で所有している西泊から船で15分くらいの周囲3キロほどの品木島^{しなき}では村民が共同で漁ができる（2008年2月聞き取り）。防風林の役割を果たす重要な資源として、山林は集落全23戸がもつ共有地で勝手に伐採することはできない。西泊では冠婚葬祭は既に業者任せになっているが、漁協で公民館に集まり魚の供養はしている。なおひな祭りや節句の祝いですご馳走の準備は集落内で協力して行っている。

河内^{かわち}の70代の女性によると、出身地の佐護の仁田ノ内地区では「カタヨリに植えよう」と言って田植えや芋、麦取りでお互いに手助けをしてきた（2012年3月聞き取り）⁽⁵⁴⁾。このカタヨリは田植えでもまた木庭焼き（焼き畑）から播種作業でも行われ、特に麦播種前の厩肥の運搬でよくされた（田川, 1988, 37-38頁）⁽⁵⁵⁾。この女性は姉の時代に石屋根を倉庫として着物や米を蓄えたが、瓦になってもお互いカセイで手助けしてきた。この河内の35から40軒くらいの集落ではカセイとして、瓦を変えるときや葬儀のときは一家から2人ほど出したと言う。地区の共同作業ではクリーンアップ作戦で年1回草刈りやどぶ掃除があるくらいで、海の掃除は漁協の組合員がする。このように地域社会では生活のために様々な互助慣行が生まれたが、しだいに衰退している。

鰐浦地区で区長を1回、副区長を2回、また消防団長や社会福祉協議会の役職も勤め

た70代の男性によると、この部落では山が険しく土地が少ないため貧しく漁業しかなかった（2012年3月聞き取り）。しかも磯場が狭く、近海^{うみ}の海栗島でヒジキやワカメなどを共同で採取することで生計を維持してきた。家の修理などをカタヨリで行い、海の仕事が休みのときは山の焼き畑で「今日はカセイしてくれない」と言っ^て、お互いに共同作業をした。ヒジキなど海草類を全集落で決まった時間に収穫したものを共同で売りさばき平等に分配した。これは男女関係なく一家から出た人数分もらうことができた。これらは個人ではなく、販売所に集めてとりまとめ役を通して売った。こうして決められたルールを守り、一定の範囲で好きな場所で取っても平等に分配した。ここには集団としての強い共同性が見られる。役職や漁業販売などの役割を決めたときは日当を出して働いてもらうが、部落の中心的な人が休むときは自分たちも休みにして、地域社会の生活のリズムを守ってきた。

鰐浦の区長は1年交替だが、役場に頼らずお寺に集まり話し合いをして住民中心に地域活動を行ってきたが、地域の積み立てに加え漁協や町からの補助で住民センターができてから活動の拠点が^{お寺}から移った。年1回の掃除は夏場の前、国天然記念物の開花に合わせたヒトツバタゴの祭りの前に沖の仕事^をを休み部落全員で海をきれいに^{する}。現在は漁も少なくなり、浜の掃除にはお金が出るようになった。山は旧本戸の53戸がもっていたが、磯場は全員の^{もの}で組合員の資格のある者、また選挙権がない準組合員も平等に採ることができる。葬儀があると部落全員が休日にして手助けをした。この古老が小さいとき頼母子は家の改築や旅行、病気で必要なときにしたと言う。特に病気で困っている人がオヤになり、その人のため講に参加することがあった。生業が同じであることに加え、鰐浦地区の交通の便が悪いことも共同の輪を強くしたと言われている⁽⁵⁶⁾。同地区の70代の女性によると、食事でもてなすサナブリがあり、葬儀は婦人会としてカセイで手助けした（2012年3月聞き取り）。このように鰐浦は対馬でも特に人とのつながりや絆の強いところとして知られている。

豊地区^{とよ}の3人の80代の女性によると、麦つくりで「カタヨリをしよう」と言い、5人で5日間麦をかき、芋や山のふきも採った（2012年3月聞き取り）。本戸の44戸が共有地として土地をもち、借地料は共同で貯蓄している。お産や病気のときはカセイをし、家を建てるときは講をしたが、そのときは家を建てたい人が宿番となり食事のもてなしをした。この地区には隣保班が7つあり、常にお互い手助けをしてきた。仲間の意味をもつカテイシという行為は田植えや稲刈りなどの農作業の手助けだが、「明日はあなたにテモシする」と言うように交換行為でもあった⁽⁵⁷⁾。講については地域によってコウカケと言って少しずつお金を出すこともあったが、農村部では現在ほとんど行われていない。以上のように韓国の個別集団単位の互助慣行と比較すると、日本は地域社会全体の集団としての共同性が強いと言えるだろう。

(2) 「互助慣行移(輸) 出入」の仮説検証

①生活様式移転の足跡

戦前戦中対馬には朝鮮人が炭焼きで住み、集落を形成していた。対馬の特性として外から来る人には閉鎖的なところがあり、朝鮮人となると地域社会ではそれほど交流が多くなかったと想像される。それでも鰐浦地区の70代の男性によると、小学校の頃韓国の海女が漁業権を取得し、この近辺でワカメを採っていたことを記憶している。採ったワカメは地面に並べ乾燥させていた。また朝鮮出身の炭焼きの子供たちが小学校にいた(2012年3月聞き取り)。この古老は朝鮮の子供たちが話していたチングイやサロムという言葉は今も覚えている。逆に子供たちは日本語を覚えようとしていたと言う。豊地区の3人の80代の女性によると、自分たちが小学校の頃炭焼きの子供たちが30人のクラスで1割くらいいた(同上聞き取り)。海女が船を持っていて、サザエやアワビを採り、ワカメを板に延ばしていた。またこの地区の須潟^{すがた}の缶詰工場近くの納屋には朝鮮人の家族がオンドルを使い住んでいた⁽⁵⁸⁾。河内から朝鮮に奉公などで行く人もいた。このように比田勝周辺では戦前炭焼きや済州島の海女をしている親の子供が日本人名で学校に通っていたが、終戦と同時に半島に帰ったと言う(2008年2月聞き取り)。

対馬は韓国に近いとは言え、生活習慣という点で交流というよりも断絶が見られると言ったほうが正確であろう。このことはまぎれもなく対馬が日本の文化圏に属することを意味する。しかしながらよく地元の古老に聞き取りをすると、韓国からの生活習慣の影響を垣間見ることができる。豆酸^{づつ}地区では、^{かしほの}檜穴と言って小川近くで穴を掘り食べ物を貯蔵する習慣が韓国から伝わっている(2006年7月聞き取り)。これはドングリの実などを入れてあく抜きして保存した貯蔵庫で、こうした跡が豆酸に残っている。この他韓国の井戸なども対馬に取り入れられた。この点河内の70代の女性によると、小学校のときはまだ半島人が多く住んでいて、自分の兄弟姉妹の上の人たちはハングルをよく覚えていた。特にチング(친구)という言葉も親しい友人を示すとき使っている。朝鮮人が対馬で炭焼きに従事していた頃、その住居跡にオンドルが見つかったが、親の世代がオンドルを使っていたことを覚えている(2012年3月聞き取り)。対馬にきた朝鮮人は炭焼きや海女として働いたが、そこで使用したオンドルが日本人の生活様式にも影響を与えたことがわかる。なお豆酸^{づつ}の80代の地元郷土史家によると、豆酸は上、下、浜という3地区に分かれ、^{くぞう}備僧という祭りを主催する組織が行政組織とは別に葬儀組織としても機能していた(同上聞き取り)。この他茶講では困っている人に用立てることがあった。このように対馬の豆酸には独自の互助慣行があった。しかし対馬には朝鮮半島から多くの生活様式が入ってきたものの、逆に対馬から半島に持ち込まれたものは少ないと言う⁽⁵⁹⁾。

②「互助慣行移（輸）出入」の可能性

「地域的社会的統一」として自然結合の關係が示される自然村（旧洞里）の活用は戦前戦中の朝鮮において日本の植民地統治の一貫としてされてきた⁽⁶⁰⁾。そこに強制互助があったことも推測される。互助慣行はその社会結合の最も原生的な姿を示していることが本稿の問題意識の基底にあるが、この点について「制度の移（輸）出入」という仮説から考えたい⁽⁶¹⁾。衣・食・住という生活様式のうち、カタチあるモノの輸出入は特定化しやすいが、カタチのない生活習慣はその関係を跡づけることが難しい。ここでは国を超えた生活様式の相互影響から日本と韓国の互助慣行を捉えることにする。

日韓併合後の朝鮮の農村生活の実態は資料に乏しいが、陽徳（現北朝鮮）で金融組合に従事し、朝鮮人の反乱で跋となった重松麟修^{あきなお}が記した『朝鮮農村物語』（1941）から当時の生活様式を知ることができる。重松はその後異動により江東でかつての両班部落での養鶏事業からさらに豚や牛の家畜を奨励しながら農村開発を進めた。その過程で村民のため集会や夜学、共同作業場として利用する会堂（鷲岩青年会堂）をつくることになり、このとき門契の人から建物の材木や木工賃の実費を出してもらった（重松、1941、240-251頁）。土地（敷地）代は地元の朝鮮人青年の組合職員が出し、建設費をこの門契の人たちから支援を得ている。20日間にわたる砂利や柱石を据える基礎工事は村民の共同奉仕によるもので、早起会と名付けられた青少年の奉仕（ボンサ）活動は壁土の運搬や屋根葺きに動員され、部落の美化作業も行われた。このとき日本式作業を朝鮮の農村に持ち込んだことも想像される。作業の始めに「君が代」を斉唱し、終了時には「ヨイサ、ヨイサ、ウンツツケ、モツツケ」のかけ声を出してする天突運動と同様に「ウンツツケ」などのかけ声を出す「太平洋乗切り運動」の体操をするところは植民地の統制色が見られるものの、日本式⁶²の共同作業と朝鮮の契の融合による支え合いの社会システムとも言えるだろう。これらはさらに鯉の稚魚の養殖事業にも表れている（同上、365-378頁）。部落民の共同利益の事業として、重松は日本的な農村開発の手法を朝鮮で実践した。こうした行為を日本的な互助慣行の移転と捉えることもできるだろう⁽⁶²⁾。しかしその一方でそこには「共生移転」ではなく、「強制移転」の性格があったことも否定できない。

日本統治期の強制的な互助慣行とは別に、一般的な互助慣行についてはどうであろうか。少なくとも対馬の相互扶助と韓国のそれとの接点は見出せない。朝鮮半島と日本の関係を解く手がかりの一つにチングという言葉がある。親しい関係はそこに互助関係が内包される。チングは「親友」を意味するが、これは日本の対馬、五島列島でも使われている⁽⁶³⁾。仲間という意味をもつチングが対馬で多く用いられているところから、文化圏の交流の片鱗を見出すことはできる。既に紹介した豆酏^{とうり}の80代の地元郷土史家によると、チングという言葉は戦時中に入ってきた言葉ではないかと言うが（2012年3月聞き取り）、確証があるわけではない。戦前、戦時中により多くの朝鮮人と日本

人の接触があったことは間違いない。またそれ以前近世の倭館時代からの交流もあるだろう。鰐浦地区の70代の女性によると、自分は朝鮮に行ったことはないが、主人の親が朝鮮の麗水ヨスに大工として出かけたことがあった（2012年3月聞き取り）。散髪に行くにも船で釜山に行ったという人が少なくない。会えばチングという言葉で呼びかけられるにつれ、お互い親しくなるとその言葉を頻繁に使い、しだいに定着したものと考えられる。先に述べたように、小学校に通う朝鮮の子供たちが話す親しみある言葉のチングが、日本の子供たちにも浸透したものと想像できる。

全体として制度の移（輸）出入として朝鮮との接点は為政者レベルに多かったとはいえ、庶民レベルの生活でも実際にあったことが推測される。しかしそれが記録として残っていないため、言葉を含めた生活様式の足跡という聞き取りを積み重ねることで事実の断片をつなぎ合わせるしか手だてがないのが現状である⁽⁶⁴⁾。朝鮮統治時代から日本人が半島に渡り、そこで日本の生活様式が持ち込まれたことで朝鮮人に何らかの影響を与えがことが考えられる。日本のタノモシ（頼母子）という言葉はチングという言葉とは逆に朝鮮に入ったものと比定される。既に契のところで述べたように、麗水近郊の突山島（邑）ユンリン里のソユル村では70代の男性からドンケ（金融契）の意味でタノモシ（頼母子）という言葉を使っていたことを聞いた（2012年3月聞き取り）。これは30年くらい前の話で、この老人は日本との接点はなく、言葉が使われていた事実は日本との関係を考えるうえで大変興味深い。また60代の村長もタノモシケと言っていたことを記憶している。これは昔からそう呼んできたのでいつからかはわからない、また日本の漁船がこの突山島まで来たことはないと言う。隣のテウル村の60代の元村長もまた同市南面の金鰲島クモドの60代男性もタノモシがいずれも日本語であることを知っていた（2012年8月聞き取り）⁽⁶⁵⁾。他の新安郡の島で70代以上の女性はタノモシという言葉聞いたことはあっても、それが日本語であることを知らなかった（同上聞き取り）。

しかし日清戦争前後の政情不安の中で朝鮮を訪問して記録した『朝鮮紀行』によれば、当時日本人の漁師が釜山で8千人も水上生活をしていた（Bird, 1905, 39頁）。他の島嶼地域との漁を通じた交流も当然考えられる。日韓併合以前に日本が事実上朝鮮に進出した頃、朝鮮人との接触の過程で様々な日本の生活様式が入ってきたものと推測される。終戦時には木浦モッポ（府）の人口約8万5千人のうち、日本人が約1万人もいた（森田・長田編, 278頁）。麗水市の突山島や南面の金鰲島などで聞いたタノモシ（ケ）という言葉は日本人と朝鮮人の公然としたあるいは隠された交流を物語っているように思われる。「公然とした」という意味は日韓合併以降の日本文化の流入で偽政者レベルの導入であり、「隠された交流」は庶民レベルの共同生活圏の中から頼母子の仕組みも含めて浸透してきたことを意味する。ただ言葉だけの「移（輸）出入」ととどまる点も否定できないだろう。しかし小口金融の利息の仕組みなどは制度として伝わったことも考えられる。その一方で互助慣行については人間が生活するうえで欠かせない「生活の智慧」から生

まれたどの地域でも見られる普遍的な慣行であり（同時多発説）、それが個々の国や地域で固有の慣行として蓄積し発展してきたとも推測される（固有発展説）。それでもその仕組みの一部は双方の交流圏の中から行為様式として制度化されてきた点も完全には払拭しきれないと思われる。

5. 結語

本稿は朝鮮半島の代表的な互助慣行として、互酬的行為としてのプマシ、再分配的行為として共同労働のドォレやブヨ、互助組織としての契、支援（援助）的行為のドゥムなどについて、先行研究である鈴木との戦前戦中の朝鮮、1970年代の伊藤の研究を踏まえ、2000年代以降の現状を主に全羅南道の島嶼地域での聞き取り調査を中心に述べてきた。特に契については現在も互助組織として多様な形態が見られる。こうした韓国の互助慣行の特徴を儒教倫理がもつ社会秩序から考察したが、その相互扶助はタテとヨコの社会関係によって規定されている。その制度的特徴としてタテの歴史的系譜に基づく門中の共助は大きく、サンジギ（山持己）の制度による生活困窮者への土地の貸与など、門中内の互助ネットワークが強固に張り巡らされている点は日本との大きな違いと言える。また同じ地域社会に住む隣保意識や離れていても類（親）縁意識から多様な契に見られるように、住民間や仲間内のヨコの連帯と共生を生み出している。本稿はこうした韓国の互助社会の構造を浮き彫りにしたが、日本と韓国の互助慣行の接点として地理的に近い対馬を通して「互助慣行移（輸）出入」の仮説の検証を試みたが、この点の解明は今後の研究課題としたい。このような日本近隣諸国の互助慣行の研究が「東アジア共同体」の政治経済的側面だけでなく、人とのつながりや絆という社会的側面にも目を向ける契機となることを期待したい。

（*）本論文は、平成23（2011）年度から平成26（2014）年度の科学研究費助成事業の学術研究助成基金助成金による研究成果の一部である（〈課題番号23530679、基盤研究（C）〉、課題研究「互助ネットワークの民俗社会学的国際比較研究」）。

注

- （1） 韓国の互助行為あるいは互助組織の研究は戦前においては先に述べたように鈴木榮太郎が先鞭をつけたが、戦後は伊藤亜人（現在東京大学名誉教授）が中心で、本稿もこの二者の見解を参考にしながら筆者が聞き取り調査によって得た新たな知見を加えたい。また二者に欠けていたと思われる行為の志向性に基づく互助慣行、さらに「互助慣行移（輸）出入」という点から韓国の互助社会を浮き彫りにする。
- （2） 地方によって呼称が異なるのは日本と同じだが、たとえば鈴木が戦中調査した朝鮮の黄

海道瑞興郡月灘里の部落ではソンバヌムと言った（鈴木, [1943b] 1973, 453頁）。またプマシではなくホラシという言葉も使われた。ここではその統一的な呼称として日本ではユイ、朝鮮ではプマシに代表させた。なお日本の互助慣行については拙著（恩田, 2006）で詳細に記したが、ユイが賃金化するヤトイの語源としてユイを一方的に取るユイトイ（トリ）を指摘した早川などの指摘も参考にした（早川, [1937] 1977）。

- (3) 戦前戦中の植民地期朝鮮、現在の北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）の農村事情は鶏や牛、羊を育て農村開発を進めた重松麟修^{あきなお}の貴重な記録『朝鮮農村物語』から知ることができる（重松, 1941：1945）。ただこの記録が印刷事情悪い中で続編『続・朝鮮農村物語』まで刊行されたのは、日帝時代の農村振興運動の一貫として植民地朝鮮における日本の指導者による農村開発が朝鮮人にとって大いに役立っていることを広く知らしめる意図もあったように思われる。そのことは続編の奥付に「承認番号第44号、発行部数8000部」と記され、本文中に「皇国日本の農民」として戦時下の朝鮮農民を指導することが述べられているところからもうかがえる（同上, 1945, 68頁）。そこに農村における集団の凝集性や住民の一体感を高めるねらいもあっただろう。日帝時代の金融組合による農村振興運動の影響があるとは言え（山辺, 1971, 48-51頁）、こうした記録から当時の農村事情を知ることができる。またそこに政治、経済、社会、文化の各分野にわたる日本の朝鮮支配を認めるとして（朴, 1973）、それとは異なる農村開発、すなわち重松の農村指導が人間開発の取り組みであった点は注目される（恩田, 2001）。
- (4) 戦後の先行研究は伊藤の調査があるのみで、現代の韓国の互助慣行についてはその後体系的な研究はされていない。特に日本の互助慣行との比較を念頭に置いた研究は皆無である。このため筆者はこれまで日本の互助慣行との比較という視点から、平成18（2006）年7月に釜山、9月にソウル他で、断片的ではあるが本格的な研究の事前準備として互助関連の予備調査のヒアリングをし、また2007年8月安東^{ハプエマウル}の河回村で民宿関係者と済州島では漁村出身者に互助慣行の聞き取りをした。その後日本学術振興会の科学研究費助成事業の学術研究助成基金助成金による「互助ネットワークの民俗社会学的国際比較研究」（課題番号23530679、基盤研究（C））による調査で2011年の9月と翌年3月、8月に全羅南道の島嶼地域の漁村を中心にした聞き取り（半構造化インタビュー）調査を実施した。なおハングルとその日本語のカタカナ表記については、慶應義塾大学総合政策学部のソンユンギ君に大変お世話になった。
- (5) 全羅南道の珍道郡智山面細方里^{セパン}で三期（一期2年の選挙）務めた70歳の元里長から聞き取りをした。この里は44世帯で人口が89人である。里（大里）の下に班（小里）がある。前者は行政村、後者は自然村と言える。この聞き取り調査に加え、珍島文化院で資料の収集を行った。なお郷土資料などを一括して保存している珍島文化院の係員の話では、セマウル運動によって村落が活性化したことは認めるが、新しい運動を始めるにあたり必要ないとの当局の判断によって、これまでの生活に関する資料が散逸してしまったと言う。このことは残念なことだが、伊藤亜人氏が1970年代に撮った農民の写真が貴重な資料として残っていることを聞いた。また同じ珍島の義新面カゲ里でも聞き取りをしたが、そこは30世帯で120人ほどの集落である。
- (6) 慶尚北道の安東市郊外の河回村では機械化されて以来、この種のプマシは行われていない（2007年8月聞き取り）。ここの伝統的な瓦葺きや藁葺きの韓屋は国から補助が出て維持され

- ている。なお、現在も両班^{センパン}の子孫が先祖から受け継いだ家屋を守り暮らしているが、2010年にはユネスコの世界遺産に指定された。
- (7) この70世帯で140人くらい住む東内里で聞き取りを行った。70代の女性（79歳）は20歳のときから東内里に住み始めたが、字も書けず読めない人だった。
- (8) この30世帯80人くらいの漁村は黒山島の港から車で15分くらいのところにあり、アワビの養殖が盛んなところで生活はそれなりに安定している。この島には25の里（行政村）があり、36の自然村がある。集落（地区）のまとめ役が里長で、ここでは任期が1年で話し合いで決めている。
- (9) 木浦に戻る船が風のため欠航になり、さらに1日滞在したため港近くの文化会館でこの黒山島郷土研究保存会の男性からたまたま話を聞くことができた。
- (10) この都草島^{トチャド}では都草面議員の議長をしている60代の男性から聞き取りをした。この男性のお父さんが日本に留学していたと言う。そのときメガネをしないとインテリに見えないと言われ、学者や学生はメガネをかけるものだと思っていたことも話してくれた。1,700世帯、人口3,500人ほどの島で、行政村（里）が10あり、自然村が33ある。漁業よりも農業中心で綿も採れる。なおこの島名の由来は朝鮮ハリネズミのカタチをしているのでつけられたとされるが、このネズミの発音が島の名前の発音に似ているとも言われる。この島で困っていることを聞くと、島に来る交通手段が限られている点を指摘し、また保健センターがあるものの医療が十分ではないこと、さらに小中高の学校がそれぞれ一つずつあるが、若者がよりよい教育を求めて島を出て行くことが問題になっていると言う。この点は日本と変わらない。
- (11) 50代の里長によれば、徳牛島は62世帯で人口は85人である。この島名の由来は近隣の青山島から見ると、太った牛がすわっているように見えるのでこの名前がついたと言う。なお莞島^{ワン}の莞は笑う意味があり、自分のふるさとのことを思うと、自然に心ほみ笑みが漏れることからついたともされる。小学校は5,6年前まであったが今は徳牛島にはない。このため若いお母さんは子供と莞島で暮らし、お父さんが島で働いている。高校までお母さんと暮らす子供もいる。保健センターはあるが、病気になると島では対応できない。しかしアワビの収入が多いので、島自体はそれほど貧しいわけではない。
- (12) シル島、秋島、沙島、長沙島、ナクツ、ヨンモク、真台島などの島から成る沙島里の沙島で、60代の女性から聞き取りをした。平均年齢が70代の島で、23世帯、人口が42人である。
- (13) この70代の男性によると、このソウル村は65世帯で人口は100人ほどである。この小さいユルの隣村に大きいユルを意味するテウル村があり、こちらは73世帯280人ほどいる。
- (14) 日本のお大阪に住んでいたことがある婦徳里出身で現在は飲食店を経営し農繁期には農業もする50代の男性に地域開発について聞くと、若い人が内陸部の済州市^{チェジュ}や半島に出て行き人手が足りなくなること、また済州島は水がおいしいのにゴルフ場の開発で菓をまくためそれが心配だと話してくれた（2007年8月聞き取り）。
- (15) この聞き取りは金寧里の40代の里長に対して行った。里は1,170世帯、人口3,000人の大きな行政村で、海女の村として知られている。海岸に出るとたまたま海女たちが出かける準備をして軽トラックに乗り込むところであった。4キロから5キロと里の範囲が広いので、年齢の高い海女は体に負担がかからない東の海岸に行ったかもしれないことを聞いた。なお一番困っていることは若い人がここを離れて済州市内に行くことで、島の人口65万人に対して40万人というように島内人口の一都市集中が見られる。

- (16) この女性は17歳から50年間も海女をしている。海女の仕事は7時から17時頃までで、今は体をこわしてしばらく休んでいると言う。日本の対馬にまで行って海女の仕事をした人の話を聞いたことはあるが、対馬以外のところに行く人もいえると言う。現在海女になる若い人が少なく、後継者不足が問題であることも語ってくれた。
- (17) 2012年8月^{モッポ}木浦大学島嶼文化研究院で聞いたところ、20歳以上のテドンペ（大同組）と20歳未満のソドンペ（小同組）があり、プマシが田植えと稲刈りのとき行われるのに対して、その間にされてきた。鈴木は小人組を17,8歳としたが、これは朝鮮の数え年で言えば20歳になるものと推測される。この一時期大量の労働力を必要とするためにつくられた組織は毎年繰り返し行われた。堆肥用の山草刈りでは、小人間で体力の違いから収穫に差が出るため、収穫後全体で配分を調整してきた。なおこのドォレには女性がする織物ドォレ（ツレ）もある。
- (18) 島は今から150年ほど前の話として、かつて生活に困った人ではなく、島のために手柄を立てた人に島の海産物をとる権利を与えることがあった。たとえば島の税金が高いとき、その不当さを訴えて税金を安くした人が島をもらうことがあったと言う。この島はテソンと言いい、今も個人がその権利を受け継いでいる。
- (19) 同郡新安郡の都草島ではプヨという言葉はあまり使わない。生活困窮者に仕事を与え賃金を出すことをコンゴンクルローと言った（2012年3月聞き取り）。都草面議会の議長によれば、1950年から54年くらいまでの間北朝鮮がこの島を支配したとき、上の人が命令して働かせる言葉としてプヨを使っていた。自分の意志で働く言葉ではなく、強制されてする共同作業で言った。プヨは地域によっては強制的な労働を思い起こさせる言葉でもある。
- (20) これは金寧里の漁業協同組合（漁村会）の50代の組合長の話である。なおこの地区には130人くらいの海女がいて、年齢は50代から80代までで、10月から5月下旬くらいに仕事をする。車で移動する海女は水深3mから4mくらいのところで、また船で移動する海女は10mから12mくらいの海で仕事をする。なおここから日本に行く海女はいないが、40年から50年くらい前には対馬まで行った海女がいる。毎年10月に海女の祭りがあり、日本の海女との交流がある。年々高齢化し、今は装備なしで仕事しているが、将来は装備を使ってしか仕事ができないかもしれないと言う。
- (21) 漁業協同組合の40代の女性職員によると、この地域には60人くらいの海女がいて、50代が一番若く、85歳の人が最高齢である。5時間以上働くが、80代の人は3時間くらいで、年間働くものの、2月は寒いので仕事をしない。夏は海産物を保護するため仕事をしないが、この時期に船と契約をして技術のうまい海女が日本に行く。東日本大震災の前までは福島周辺にも行った海女がいる。かつて対馬に行った海女の話を聞いたことはあるが、今はない。現在は関西方面に行く海女がいる。20年前は100人以上の海女がいた。趣味で海女をする若い人はいるが、将来は仕事で海女をする人はいなくなると、この職員は予想している。「海女の会」という組織があり、ここでもいろいろ他の地区の海女と意見交換して海女の後継者を育て若い人の理解を求めるため話し合いをしている。
- (22) 海女は潜女や潜嫂として済州女性の強靱性と勤勉性の象徴とされたが、戦前は日本や中国、ロシアまで出稼ぎに行っていたと言われている。この点は2012年9月の調査で、注21で示したように現在も日本の関西方面に出かけていることを聞いた。1930年代の済州島の調査では全村の共同作業がスヌルムと呼ばれていた（泉, 1966, 153-156頁）。

- (23) この地域は現在生活水準がよく、魚もいい値段で売れている。地域づくりについてこの里長に聞いたところ、今一番の問題は高齢者が多く、若い人が少ないことである。農業に必要な機械も少なく、畑に水を引くにもお金がかかるという。
- (24) 同じ莞島郡の生日島（面）では周囲の属島ごとに海苔やワカメなど採取区域を毎年公開抽選で定め、たとえば10人で採った海産物を13に分けてそのうち10を10人で取り、残り3を島の生活に困っている人に分け与える慣行が木浦大学島嶼文化研究院の調査チームによって報告されている（召, 2010 pp116-122; 2012年8月聞き取り。分けた区域をジェビと言い、この貧しい家はエホ（衰〈愛〉戸）と呼ばれた。このジェビ制度は区域割り当ての期間が長くなっているが、現在も行われている。
- (25) 親島周辺の無人島の多くが個人所有で、ソウルの居住者に周辺の高産物の権益による収入目的で転売されているところから、都市化による開発の波が大きいことがわかる。なお新安郡の押海島（面）では50代の男性によると、40年ほど前にトンゲサン（地域の山）として山を共同で買い、オンドルの燃料として木を伐採して分け合ってきたという。なおそれぞれ聞き取りをした荏子島のデキ里が70世帯、者羅島の者羅里が50世帯、安佐島のウップドン（洞）が150世帯、荷衣島のフクアン里が40世帯、同島のデ里が130世帯、押海島のシンジャン里が100世帯ほどの地域社会の規模である（2012年8月現在）。
- (26) この都草島で60代の面議員の人に聞いたところ、生活に困った人を救済するのは島（村）ではなく、国がすることであるという公助の考え方も当然ある。これは都草面議会の議長としての見解であることに留意する必要があるが、このように共助よりも公助への依存が少ない。
- (27) 鈴木は日本の旧幕府時代の村を自然村とし、その等価物を日韓併合後の洞ではなく李朝時代の洞とした。ただし地方によっては里と呼ぶところもあるので、旧洞里（里洞）という言い方をしている（牧野, 1973, 504頁）。この洞の上の単位が里（行政村）であり、さらに面や道があった。上の単位になるにつれその社会的統一性は単に行政的側面に限定される。
- (28) インドネシアのパリ島などで見られるスパック（水利組合）が同様の組織と言える。
- (29) これは共同で牛を購入するための資金を供出するベトナムやタイの農村で見られる牛銀行の仕組みに近似する。
- (30) 伊藤が調査対象地に選んだ珍島はセマウル運動がそれほど浸透していない所とされる。この上からの行政中心の農村開発運動には現場からの批判を許さない状況が支配的であった。中央から鉱山物資が農村にもたらされ、その勢力が末端の地域社会に浸透し、契はヨコの社会関係を前提にするためしだいに衰退し、その分タテの上下の秩序関係が維持されていく。模範的な村落では中央とのブローカーとしての役割を果たした指導者への聞き取りはされたものの、セマウル運動の実態については詳細が必ずしも明らかにされているわけではない。こうした点を筆者は伊藤氏から直接聞いた（2012年2月聞き取り）。
- (31) 軍友契は退役軍人の集まりで、ベトナムの農村にも見られる。日本にもこの種の戦友組織は見られたが、高齢化とともに解散するところが多い。
- (32) 伊藤氏への聞き取りによると、70年代、80年代に都市部では、梨花女子大学の卒業生が夫の社会的地位を利用して財テク（3割の利息）の契を盛んに親睦目的で行っていた。その一方で利息が高い農村部の資金をどう経済活動のルートにのせるかが財閥系の金融機関の課題となっていた（2012年2月聞き取り）。この点ベトナムでは農村部の資金活用が問題となり、

中国ではその資金を吸収することを社会主義の徹底で解決してきたとされる。なお日本では商人が仲介役となり農機具購入のため頼母子を勧め、長野県では漆職人が地場産業の振興のため行ったこともある。

- (33) 日本の受け取り方式は利息を掛け金に上乗せしてより多く払うものが受け取る「積金式」と取り分を最も少なくする者が落札し定額を払い続ける「割引式」に大別される（恩田, 2006）。
- (34) 珍島文化院の職員によれば、契についての記録は残っているが、そこにはお金を集めて何に使ったかが出ている。しかし注(5)で述べたように、セマウル運動を始めるに当たり古い資料は必要ないとの判断から、特に飲食や生活に関する資料が廃棄されてしまった（2011年9月聞き取り）。
- (35) 戦前戦中の朝鮮（平原郡、安州郡）を調査した鈴木は郷土軍（ヒヤントク）という農業労働の奉仕隊があり、手不足の田主がこの労働隊に賃金を出して依頼していたことを報告している（鈴木, 1973, 456-459頁）。
- (36) これも地域性のある言葉と言えるかも知れない。全羅南道の海南郡玉泉面で聞いたところ、ドゥーンダ（助）という言葉は使わない（2011年9月聞き取り）。なお、日本の与那国島では本土のユイに当たる行為をドゥイと言うが、これはベトナム語の交換を意味するドイ（*dôi*）に近似する。
- (37) 済州島の青年会は30代半ばくらまでの青年が、中には結婚して40代の者もいるが、地域社会でいろいろな手助けを行っている。女性は婦人（女性）会があり、結婚式で手伝いをする。特に高齢者の組織は婦德里ではない。このポバン里では済州市と異なりNPOのような市民組織はなく、こうした若者の組織が活動している。また4つの里が集まり、共同で活動することもあると言う。地域づくりについて聞いたところ、農業でそれなりの生活ができるため少子化の問題は少ないが、注(5)で述べたようにしだいに若い人が済州市を始め半島の都市に出て行く傾向があると言う。
- (38) 2011年9月に聞き取りをした珍島細^{セパン}方里の元里長はしだいに伝統的な生活様式が衰退していく中で、行政の対応が十分でないこと、若者の流出による高齢者が多い文字通り「シルバータウン」になる点、また新しく移住してくる者もいるが、こうした新住民の金持ちだけの島になりかねない点を危惧している。その一方で土地を新たに取得することで様々な地域社会の権利が継承され、海産物などの入り会い関係では新住民も旧住民も良好な関係が保たれ、建前（棟上げ）などで手助けがされていることを指摘している。韓国の農村は今大きな転回点を迎えつつあるが、かつてのセマウル運動はその意図的な「大転換」を求めた。この運動に対しては里の道路が舗装され、島民意識も高まったことから、生活が向上した点をこの元里長は評価している。
- (39) 中学や高校で漢字が教養科目として位置づけられるのは1980年代以降とされる。
- (40) 伊藤の論文（1977b）がマクロの視点とするなら、1977aのそれはより詳細なミクロの視点に基づく。韓国の儒教と契との関係については、伊藤氏から貴重な意見をいただいた（2012年2月聞き取り）。
- (41) 日本の「困窮島」（生活更生島）同様、一定の義務を伴う点は共通する（恩田, 2006）。なお祖先崇拝はお墓の管理に表れるが、韓国では土葬から火葬に変わりつつある。かつては火葬にすると先祖に罰が当たるとも言われたが、国の奨励もあり火葬が普及している。

- (42) 農地はあっても若者が農村を離れるため、それを利用する後継者がいない点は日本の農村と共通する。韓国ではかつて一人っ子政策が採られ、その影響が今の少子化につながっていると見る意見も聞くが、ただセマウル運動は農村にとっては良かったとする意見が少なくない。今まで家の外にあったトイレや台所が家の中に設けられ、生活の利便性が高まり農村の近代化が向上し、現在もその効果が持続していることをこの永信里で話を聞いた。
- (43) 新安郡の都草島で聞いた60代の男性は、サンジギはあまりよくない響きをもつ言葉だと言う。もともとこのサンジギは門中の中でも有力な家で家僕（召使）として働いていた者が墓地や山の管理をしていたことがあり、見下す言葉の響きをもっている点にも留意したい。昔はこうした意味から使われていたため、少し見下す言葉としてのサンジギよりも、今は近代化されて門中（ムンジュン）の土地を守る人の意味をもつムンジュンジキミの言葉を使うことが多くなったと言う。これは自分が門中の一番上の者としての個人的見解としている（2012年3月の聞き取り）。
- (44) 島には保健センターがあり緊急のとき治療できるが、病院がないため病気に対する不安が大きい。このため島を出る人が後を絶たない。しかしアワビの仕事がそれなりにあり、若い人もこの島に住みついている。その一方で中国人など外国人労働者に頼るところもある。60代の自分も4、5年後にはこの島を出ることを考えているが、お互い迷惑をかけるので子供のところではなく一人で暮らしたいと言う。なおこの黒山島には済州島からの海女がシーズンになると来るが、黒山島にそのまま住み着き、毎年日本にも行く海女がいると言う。
- (45) 莞島郡生日面の徳牛島でも、里長によるとサンジギは聞いたことはあるが、この島ではないと言う（2012年3月聞き取り）。70代の古老もサンジギは島よりも半島内陸部で門中の山や墓を管理している。突山邑ユンソン里のソユル村の70代の古老によると、山や墓を守るサンジギは聞いたことあるが、今はこの島ではない。
- (46) 伊藤は調査した村でセマウル運動が広がらなかった理由として、契が利己的活動の抑制に作用し強力なリーダーが出現する素地が少なかったことを述べている点は興味深い（伊藤, 1977a）。このため強力なセマウル指導者による近代化という点では遅れたとする。
- (47) 『朝鮮農村物語』（1941）によれば、両班部落は古い家柄を誇りとし、気位が高く、徒食を誇りとするところがあり、因襲と姑息の殿堂に立て籠もり、排他的思想に満ちている（重松, 1941, 121頁）。こうした点を重松は養鶏事業で農村の生活改善を目指そうと、両班部落を訪問したときに指摘している。しかも諸官公署の指導も厭い、若い役人が部落に行くとしかりつけられて帰ってくるなど、始末の悪い部落として捉えている。
- (48) 対馬藩は佐賀の飛び地を入れても3万石であったが、朝鮮との貿易を見込んで10万石の石高を算出していた。山が多く傾斜地のため米が多く獲れず、木庭焼きの焼き畑農業が中心で、その灰を肥料にして麦やアズキ、ソバをつくった。このため年貢は麦で納めたが、米の不足分は九州各藩からの移入と朝鮮からの輸入に頼っていた。麦が主食で精白した麦をシロメと言った。壱岐に比べると、急峻な地形をもち「男島」と言われる対馬は逆に人情はおだやかな地域性をもっている。壱岐は博多に近く商売がうまく、「女島」と言われ平坦でなだらかな地形が多く、稲作も盛んに行われた（2008年2月聞き取り）。
- (49) たとえば「戊子年、遣使来朝す。書に、備後州高崎城大將軍源朝臣政良と称す。宗貞国の請を以て接待す」（申, 1471, 147頁）とある。
- (50) これは都草面議会の議長としてではなく、個人的見解である。日本統治時代私有地化が進

み、逆に土地を手離すことで共有地がさらに私有地化する大きな契機になったことを、麗水市南面の金鰲島^{クモド}の60代の男性から聞いた（2012年8月聞き取り）。また日本人が作った灯台が残っているが、その技術がすぐれていると評価している。

- (51) 西泊の集落に限らず、漁村の家の裏手には小屋が多く見られる。それらは穀物や衣装あるいは茶碗の倉庫である。どこの家でもだいたい3つほど持っている。衣装は夏のを冬入れたり、お客さん用のふとんも普段は保管しておく。これら雑屋は台風や高波などの被害で母屋の家が浸水したとき備えにしたもので、昔から伝えられてきた「生活の知恵」から生まれたものであった。
- (52) 対馬宗家に代々使えてきたという西泊集落の70代の男性によると、この周辺では戦前は農業が主で、農閑期にイカ漁などの漁業をしていた。従って農業をしていた人がもともと漁業権をもっていた。戦後は農地解放でこの漁業権も解放され、サザエやアワビなどの海産物を採る権利が広く得られるようになった。このため戦後は逆に刺し網などの漁業中心で、農業はおかみさんが換金用ではなく自家用の野菜作りとして行い、アマやヒジキ、ワカキ、ウニなどの口明け（採取解禁日）を厳格に守りながら操業を続けている。漁業ではイカの最盛期に近隣の朝鮮半島や隠岐まで出かけ、北海道からニシン漁などで働くヤン衆（若い労働者）を雇用してスルメをつくったこともあった。
- (53) イッサキ（イサキ）漁の網元と舟子の関係では水揚げ高から経費を差し引いた残りを、網元が3、舟子が7の割合で分配し、舟子はそれぞれまた分配する仕組みであった。
- (54) 豆酸^{つづ}の80代の男性によると、テモドシやコウラクという言葉も現在死語となりつつある。
- (55) 峰町では、このカタヨリは農作業、特に麦取りで使われ、早く作業が終わった人が手助けをし、その見返りをするときにもカタヨリという言葉を使った。椎茸などの木の打ち込みでもお互い手助けしたが、そのときはカタヨリという言葉は使わなかった（2008年2月聞き取り）。ここでは講（お伊勢講）が旅行の積み立てで行われていたが、今はもうない。豊玉町の水崎では漁が不振のとき講が行われた。
- (56) この地区は人口が200人を割り高齢者が多い。部落として特色を出すにはヒトツバタゴの祭りを活かすこと、また郷土芸能を後世に残していくことが大切だと、この古老は考えている。なお鰐浦地区では嫁を外に出さない慣行があったが、このことが一部血縁結婚の弊害をもたらした。船に乗る浜の仕事がわかり体力ある土地に慣れた地元のお嫁さんをもらうことが5, 60年前まであった。
- (57) カテシは椿（椿の実）の意味がある。
- (58) サザエなどの貝殻を上から型枠でつくるボタン工場もあった。ここには三重県の伊勢から海女が来て豊^{とよ}の船を使いアワビやサザエを採っていた。
- (59) この80代の男性によると、ソロバエ（聖地）という言葉もソロバル（蘇露原）、ソロバイとして半島から対馬に入ってきたとされる。
- (60) 戦前朝鮮の行政区分は道、郡、面、里、洞であり、道、郡、面が行政区分としての意味をもち、里が行政村であるのに対して、洞は自然村としての社会的統一性をもつ。さらに洞の下に部落があり、これをいくつかまとめた単位が区であった。現在は道、郡、面の下は都市部では洞、地方（農村）では里がある。この里が行政村の大里で、その下の単位には班（小里）の自然村がある。なお地方では、たとえば珍島では珍島郡智山面は242の里から成るが、そのうち聞き取りをした細方里^{セパン}では、里の代わりに細方洞里という言い方もする（2011

年9月聞き取り)。

- (61) ここで言う「移出入」は1910年の日韓併合以前を含め、日本が事実上朝鮮を支配していた頃を含めると、またその後朝鮮が日本の統治下に入ってから「輸出入」というよりも国内の制度移転と考えるなら「移出入」の言葉のほうが妥当するだろう。なおこの「互助慣行移(輸)出入」の仮説は稲作ルートの伝播に着想を得ている。そのルートはいくつか興味深い試論が展開されている(池橋, 2008)。
- (62) 江東の芝里で始めた鯉の養殖事業は昭和9(1934)年に放魚され、渇水と結氷対策として始めた池の浚渫作業は部落民の協同一致の実地訓練の場となった。このように更生部落の躍進が協同一致の精神から達成されている。養魚池で育てた鯉や鮒は入漁料として一日一円の料金を収受して、部落の基本金として積み立てられた(重松, 1941, 365-378頁)。
- (63) 長崎県小値賀町の大島の古老から聞いたところでは、地元の人は「あれはチングじゃけん」と言うが、チングの漢字はわからない。また方言として扱われているが、韓国の言葉とは知らなかったことも聞いた。この日本語としての語源を比定することは容易ではないが、両国の庶民レベルの交流を知るうえで興味深い一つの事例と言える。
- (64) 地元の対馬町に勤めていた60代の郷土史家によると、朝鮮に対する蔑視意識もあり、家族としての交流はなかったものと思われる。炭焼きの朝鮮人は定住ではなく、原木を切っては移動する生活を続けていた。パルという言葉も「掘る」という意味をもち、これもハングル(바다, 파다)から入ってきたとされる。今も炭焼きの居住跡が残っている。
- (65) 金鰲島は24の里(行政村)から構築され、この男性がいるユソン里はさらに5つの自然村から成り、一番小さい25世帯の村が貧しいときは麦でタノモシをしていたと言う。

参考文献

- Bird, Isabella. 1905. *Korea and Her Neighbours*. London: John Murray. 時岡敬子訳, 1998『朝鮮紀行—英国婦人の見た李朝末期』, 講談社(学術文庫)。
- 秋葉孝, 1954『朝鮮民俗誌』六三書房。
- 呉東珉・朴明錫, 1988『珍島郷校誌』珍島郡郷校誌編纂委員会。
- 郷村社会史研究会, 1996『韓国の郷約・洞契』信用協同組合中央会。
- 早川孝太郎, [1937] 1977『農事慣習における個人労力の社会性』三省堂(宮本常一・宮田登編『早川孝太郎全集第5巻(農村問題と農村文化)』91-151頁, 未来社)。
- 池橋宏, 2008『稲作渡来民—「日本人」成立の謎に迫る』講談社。
- 伊藤亜人, 1972「韓国農村社会の一面—全羅南道珍島にて—」『東洋文化』第52号47-159頁。
- , 1977a「契システムにみられる *ch'inhan sai* の分析—韓国全羅南道珍島における村落構造の一考察—」『民族学研究』第41巻第4号281-299頁。
- , 1977b「韓国村落社会における契」『東洋文化研究所紀要』第71号167-230頁。
- , 2006『韓国夢幻』新宿書房。
- 泉靖一, 1966『済州島』東京大学出版会。
- 감준, 2010, 『한국어촌사회학』민속원。
- 牧野巽, 1973「朝鮮の自然村を中心に」, 『朝鮮農村社会の研究』(鈴木榮太郎著作集第5巻), 未来社, 499-526頁。

- 森田芳夫・長田かな子編, 1980『朝鮮終戦の記録』(資料篇第二巻, 南朝鮮地域の引揚と日本人世話会の活動) 巖南堂書店。
- 恩田守雄, 2001『開発社会学』ミネルヴァ書房。
- , 2006『互助社会論』世界思想社。
- 朴慶植, 1973『日本帝国主義の朝鮮支配』(上・下) 青木書店。
- Rawls, Johns. 1971 [1999]. *A Theory of Justice*. Revised Edition. Cambridge: The Belknap Press of Harvard University Press. 川本隆史・福岡聡・神島裕子訳, 2010『正義論』紀伊國屋書店。
- 李杜鉉・張籌根・李光奎, [1983] 1991『韓國民俗學概説』學研社。
- 蔡實植・趙民新・金東熙, 1966『農村指導論』弘文社。
- 重松嗣修, 1941『朝鮮農村物語』中央公論社。
- , 1945『朝鮮農村物語〈続〉』興亜文化出版。
- 申叔舟, 1471『海東諸国紀』。田中健夫訳, 1991『海東諸国紀—朝鮮人の見た中世の日本と琉球』岩波書店(文庫)。
- 鈴木榮太郎, [1943a] 1973「朝鮮の農村」『東亜社会研究』第1輯(『朝鮮農村社会の研究』〈鈴木榮太郎著作集第5巻〉未来社, 11-38頁)。
- , [1943b] 1973「朝鮮の農村社会集団について」『調査月報』第14巻第9, 11, 12号(『朝鮮農村社会の研究』〈鈴木榮太郎著作集第5巻〉未来社, 39-88頁)。
- , [1943c] 1973「朝鮮農村社会瞥見記」『民族学研究』第1巻第1号(『朝鮮農村社会の研究』〈鈴木榮太郎著作集第5巻〉未来社, 107-135頁)。
- , [1943d] 1973「黄海道瑞興郡月灘里部落(草稿)」(『朝鮮農村社会の研究』〈鈴木榮太郎著作集第5巻〉未来社, 445-455頁)。
- , [1943e] 1973「朝鮮北部および西部の共同作業(草稿)」(『朝鮮農村社会の研究』〈鈴木榮太郎著作集第5巻〉未来社, 456-459頁)。
- , [1944] 1973「湖南農村調査野帳抜書」『朝鮮』第353号(『朝鮮農村社会の研究』〈鈴木榮太郎著作集第5巻〉未来社, 311-327頁)。
- , 1958「朝鮮の契とプマシ」『民族学研究』第27巻第3号22-28頁(552-558頁)。
- 宋希環, 1420『老松堂日本行録』。村井章介校注, 1987『老松堂日本行録—朝鮮使節の見た中世日本—』岩波書店(文庫)。
- 田川雅夫, 1988『対馬の四季—対馬の風土と暮らし—』農山漁村文化協会。
- 山辺健太郎, 1971『日本統治下の朝鮮』岩波書店(新書)。